

右報告ス

本信寫送付先

外務大臣

在奉天、新京、滿洲里、海拉爾、齊々哈爾各總

領事領事

關東軍參謀長 關東憲兵隊司令官

關東廳警務局長

駐哈特務機關長 駐哈憲兵隊長 第二師團參謀

長

260

昭和9年12月17日 長瀬(貞一)農林次官より
重光外務次官宛

北滿鉄道讓渡代價物資として漁業用品を輸出する
際には農林省において事前研究要望について

九水第七九七一号

昭和九年十二月十七日

(接受日不明)

261

261

昭和9年1月5日 在アレキサン드리ア北田(正元)総領
事より
廣田外務大臣宛

「日埃貿易協会」の創立による日本・エジプト貿
易の発展を期待するとの同国關係者回報について

付 記 昭和八年十二月二十七日発廣田外務大臣より

在アレキサン드리ア北田総領事宛電報第三三

号

「日埃貿易協会」設立について

(1月29日接受)

公第六號

昭和九年一月五日

在アレキサン드리ア

總領事 北田 正元(印)

外務次官 重光 奠殿
農林次官 長瀬 貞一
北滿鉄道買收代價物資ニ關スル件

目下満「ソ」間に於テ交渉中ノ北滿鉄道買收問題ハ遠カラ
ス解決ノ運ニ到リ其ノ買收代金ノ一部ハ物資ヲ以テ代價セ
ラルルコトト相成哉ノ趣報道有之候處我北洋漁業ニ付テハ
日「ソ」兩國ハ対立關係ニ在ルヲ以テ若シ「ソ」側カ本邦
ヨリ多量ノ漁業用品ヲ輸入シ其ノ漁業經營ヲ拡大スルニ於
テハ自然我方ニ不利ナル關係モ有之旁々曾テ昭和六年「ソ」
政府ニ對スル「クレヂット」設定問題ノ起リシ當時日本蟹
罐詰業水產組合並ニ露領水產組合ハ同様ノ趣旨ヲ以テ右設
定ニ反対ノ意思ヲ表明シ商工省並ニ當省ニ陳情シタル次第
モ有之候条件ニ關シ「ソ」側カ日滿側ヨリ購入セントス
ル物資中ニ漁業用品ヲ含ム場合ハ其ノ購入決定前當方ニ於
テ研究ヲ爲シ得ル様可然御配意相煩度此段及依頼候也

決議ニ關スル件

本件ニ關シテハ昭和八年十二月十八日附拙信公機密第四四

五號ヲ以テ不取敢右各方面ニ通報シ置キタル次第並ニ當地
新聞紙上ノ反響等ニ關シ報告シ置キタルカ其後當國農務大
臣ヨリハ別紙^(省略)甲號寫ノ通り在「カイロ」農事協會ヨリハ別
紙^(省略)乙號寫ノ通り又外務大臣ヨリハ別紙^(省略)内號寫ノ通り夫々回
答ニ接シタルカ右ハ何レモ丁重ナル語辭ヲ以テ本協會ノ設
立ニ對シ祝福ノ意ヲ表シ殊ニ本協會最初ノ事業カ埃及棉輸
入增加ノ計畫ニアルヲ殊ノ外満足シ居レリ。

其他大藏省、同省商工局等々關係ノ向ヨリモ類似ノ回答ニ
接シタルカ本協會ノ設立及創立委員會ニ於ケル埃及棉等ノ
輸入促進決議ハ時節柄當國官民ニ多大ノ好感ヲ與ヘ將來ノ
日埃關係及貿易増進上ニモ效果尠カラサルヘク右我方ノ処
置ハ全ク時機ニ適合シ其ノ好影響意外ニ多大ナリシモノト
觀測ス。

七 諸外国との通商問題

外務大臣 廣田 弘毅殿

日埃貿易協會創立委員會ノ埃及產品輸入促進

ヘ此段報告旁々申進ム。

追而本日接到ノ埃及農業組合來信寫一部是亦別紙^(會社)丁號ノ通り併セ送付ス

(付記)

本省 昭和8年12月27日後7時発

第三三號

日埃貿易協會ハ十二月二十七日正式ニ成立ス其ノ目的ハ一、

彼我貿易對策ノ考究及其ノ實行ノ促進二、彼我經濟事情ノ

調査紹介三、取引及企業ノ紹介斡旋四、其他彼我貿易發展

ニ關スル事項等ニシテ本部ヲ東京ニ支部ヲ大阪ニ置ク會員

申込數一六七名ニ達シ總會ニ於テ左記役員選任セラレタリ

委細郵報

(一)理事(十六社)

三菱商事、三井物産、輸出綿糸布同業會、日本棉花同業會、大日本紡績聯合會、日本綿織物工業組合聯合會、大阪綿布人絹織物輸出組合、神戸絹布人造絹織物輸出組合、横濱絹織物人造絹織物輸出組合、日本輸出莫大小工業組合聯合會、大日本陶磁器輸出組合聯合會、大日本人造肥料株式會社、

(二)監事(三社)
商船、郵船、正金、

ポートサイドヘ郵報アリタン

262 昭和9年2月27日 在仏國佐藤大使より
廣田外務大臣宛(電報)

第一一五號
客年貴電合第二二七號ニ關シ
近來當國內經濟硬化論ハ本邦側ノ公正ナル態度ノ徹底及之ニ基ク英米新聞論調ノ變化並ニ當國各方面ニ於ケル本邦經濟組織ノ研究熱ノ勃興等ニ依リ本邦品ノ廉價ナルハ生産設備ノ整備經營ノ優秀職工ノ勤勉ニシテ能率ノ高キ事國內全般ノ生活程度ノ標準カ歐米ト異ナル事圓爲替ノ下落率ニ比シ國內物價ノ高騰セサル事等ノ諸事情ニ基ク事ヲ臘氣乍ラ

由競爭放任トノ結果ト目セラル處最近本邦ニテ發行セラルル歐文貿易雜誌數著シク増加シ當方面ニモ配布セラルル模様ニシテ右雜誌ニハ各種製品ノ美麗ナル寫眞ヲ入レ其ノ製造業者名ヲ掲載シ居リ右ハ一面直接貿易即チ日本製造業者ト消費國トノ直接取引ヲ獎勵スルコトナリ邦品ノ販路擴張ニ資スル處多ク直ニ喜フヘキコトナルト共ニ他面各地ノ輸入業者中ノ或者ハ右雜誌中ノ我製造業者名ヲ其ノ儘利用シ其ノ一部又ハ全部ニ「オツファー」ヲ求メ他方右照會ヲ受ケタル我製造業者中ノ一部ハ海外取引ノ經驗多カラサル者アリ殊ニ特定市場ノ狀況ヲ承知セサル爲日本ノ市價ノミヲ基準トシテ或ハ進ンテ初取引ナルヲ以テ大ニ勉強シ特ニ利潤ヲ少クシテ「オツファー」シ且ツ之ヲ聞知シタル本邦同業者ハ競爭ノ關係上更ニ安キ「オツファー」ヲ出スコトトナリ邦品ノ不必要ナル安價賣捌ノ傾向ヲ増大セシムル

入ヲ手控ヘサルヘカラサル事アリト云フモノモ出テ來リタル状况ニテ右二點ハ客年往電第五六四號ノ〔報告ノ佛國商工省係官ノ意見トモ合セ鑑ミ我方ノ傾聽ニ值スルモノト云フヘシ

(2)按スルニ今日ノ情勢ハ所謂良品廉賣主義ト我同業者間ノ自

神戸貿易同業組合、大阪阿弗利加輸出組合、日本人絹聯合會、日本產業協會

ク本邦ニ於ケル自由競争放任ノ結果ニシテ其ノ爲我國家全體ヨリ觀テ當然取得シ得ヘカリシ利益ヲ捨テ當業者ノ共倒レヲ誘致スルト共ニ顧客タル輸入業者ノ乗スル處トナリテ値下ヲ強ヒラレ而モ其ノ値下ハ輸入業者ニサヘ迷惑トナリ況ヤ消費地製造業者又ハ他國ヨリ同種品ヲ輸入スルモノニ取りテハ重大ナル脅威トナリ殊ニ其ノ「ストック」ニ甚タシキ値下リヲ招來スル爲破産ノ危険ヲ感セシムルコトトナリ結局邦品排斥激化ノ原因トナルヲ以テ此ノ儘此ノ状態ヲ續クル時ハ次第ニ各方面ニ於テ邦品ノ輸入阻止ヲ強化セシムルコトトナルヘン

(3) 一兩年來我對外輸出ノ盛況ヲ來セルハ一面我製造業者及販賣業者ノ奮勵努力ノ結果タルハ勿論ノ儀ニシテ眞ニ慶賀スヘキ現象ナリト雖此ノ好況カ今後モ同一ノ歩調ヲ以テ持続スヘシト見ルハ頗ル危險ニシテ現在輸出激増ト共ニ生産量ヲ增大シ居ル我製造家ハ假令國際爲替關係ノ將來ヲ全然考慮セサル場合ニ於テモ前記ノ事情ニ依ル各國ノ我輸出ニ對スル阻止妨害ノ結果早晚生産過剩ニ見舞ハレ現下好況ノ反動トシテ恐ルヘキ恐慌ニ苦メラルコト無キヲ保セス早キニ及ンテ之カ對策ヲ講スルコト刻下ノ急務ト認メラル

右ノ對策トシテハ此ノ際輸出組合ヘノ強制加入ニ依ル品質ノ統制ハ勿論生産量ノ統制及價格ノ統制ヲ强行シ得ル法律ヲ制定シ殊ニ價格ノ統制ニ付テハ一種ノ商品ニ付或一國向ノ輸出又ハ賣込ハ全部當該商品ノ輸出組合ヲ通セサル限り之ヲ爲シ得サルコトトシ以テ抜駆ヲ爲サントスルモノノ爲ニ當該國ノ市價ヲ考慮セサル安値ノ出ツルヲ避ケルコトトシ又前記貿易雑誌ニモ組合名ノミヲ掲ケ個人ノ名ヲ掲載セス又在外公館又ハ本邦商工會議所等ニ對シ照會アラハ輸出組合名ヲ回答スル様ノ仕組ト爲シ置クコト一策ナリト思考セラル

最近歐洲方面ノ貿易統制強化ハ次第ニ其ノ度ヲ増シ來リ其ノ最極端ナル制度ヲ有スル露國カ英佛ニ於テ兔ニ角成功シ居ル時我方モ之ニ對應スル團体取引組織ヲ作り置クコト必要ナルヘク右ハ素ヨリ既ニ御考慮済ノコトト存セラレ且ツ各地在外公館ニ於テモ各其ノ他ノ状況及對日貿易關係等ヨセラル

リ見テ諸種ノ觀察アリト思考セラルモ當方ノ情勢ニ鑑ミ御参考迄稟申ス

尙冒頭貴電御申越ノ本邦ニ於テ輸出組合法、工業組合法等ノ關係法令改正ニ依リ必要ニ應シ組合ヲ強制的ニ組織セシメ以テ輸出統制ノ強化ヲ計ラントスル御考案ハ其ノ後如何ナル進展ヲ見タルヤ當方心得迄ニ經過隨時御電報相成様致度シ

在歐各大公使、在倫敦商務參事官、在柏林商務書記官へ暗送セリ

~~~~~

263 昭和9年5月7日 広田外務大臣より  
在サン・パウロ内山(岩太郎)總領事宛

サン・パウロ州産綿花の本邦輸入に關し調査  
方訓令

通三普通第八一號

昭和九年五月七日

在サンパウロ  
總領事 内山 岩太郎殿

外務大臣 廣田 弘毅

本邦人ノ歐洲視察者中現下ノ好況ヲ曰シテ一時的現象ト爲サス我對外貿易ノ將來ヲ樂觀スル者鮮カラス本邦輿論モ亦此ノ種觀察ヲ歡迎シ居ルカ如キ頗ル戒心ヲ要スト思考セラル

右ノ對策トシテハ此ノ際輸出組合ヘノ強制加入ニ依ル品質ノ統制ハ勿論生産量ノ統制及價格ノ統制ヲ强行シ得ル法律ヲ制定シ殊ニ價格ノ統制ニ付テハ一種ノ商品ニ付或一國向ノ輸出又ハ賣込ハ全部當該商品ノ輸出組合ヲ通セサル限り之ヲ爲シ得サルコトトシ以テ抜駆ヲ爲サントスルモノノ爲ニ當該國ノ市價ヲ考慮セサル安値ノ出ツルヲ避ケルコトトシ又前記貿易雑誌ニモ組合名ノミヲ掲ケ個人ノ名ヲ掲載セス又在外公館又ハ本邦商工會議所等ニ對シ照會アラハ輸出組合名ヲ回答スル様ノ仕組ト爲シ置クコト一策ナリト思考セラル

最近歐洲方面ノ貿易統制強化ハ次第ニ其ノ度ヲ増シ來リ其ノ最極端ナル制度ヲ有スル露國カ英佛ニ於テ兔ニ角成功シ居ル時我方モ之ニ對應スル團体取引組織ヲ作り置クコト必

要ナルヘク右ハ素ヨリ既ニ御考慮済ノコトト存セラレ且ツ各地在外公館ニ於テモ各其ノ他ノ状況及對日貿易關係等ヨセラル

近年聖州地方ニ於ケル珈琲界ノ不況ハ一般農業經營者ニ對シ珈琲栽培偏重ノ非ヲ悟ラシムルト同時ニ逐次多角農經營ニ轉向セシメツ、アルヤノ趣ニテ貴館勸業部ニ於テモ珈琲代用作物ノ研究ニ就イテハ絶ヘス努力ヲ拂ハレ在留邦人ノ適切ナル指導ニ當ラレ居ルコト、存スル處棉花ノ如キハ米、蔬菜類ト共ニ既ニ珈琲代用作物ノ主タルモノトシテ研究ノ價值アリト思考セラル而シテ聖州產棉花ハ最近其數量相當增加シ他州及外國ヘモ輸出セラル、狀態ニアリ邦人中ニモ棉花栽培ニ轉向スル者漸次增加シ其生產額モ相當額ニ上ルモノト豫想セラル、處豫メ之カ生產及販賣等ニ關スル各種問題ヲ研究シ以テ適當ニ指導且ツ施措セサルニ於テハ折角之カ栽培ヲ獎勵スルモ生產過剩トナルカ如キ場合珈琲ト同様ノ運命ニ陥ルカ如キコトナキヤラ惧ル斯テハ邦人移植民發展上ニモ惡影響ヲ及ホス虞アル一方最近本邦紡績業者中ニモ伯國棉花ノ輸入ニ付關心ヲ有スルモノモ鮮カラサルヲ以テ聖州產棉花ノ本邦輸入ニ關シ適切ナル講究ヲ爲シ置クコト最モ緊要ト思考セラル而シテ右取引實現可能ノ場合ハ單ニ邦人移住者ノ福祉タルノミナラス日伯貿易ヲ調整シ經



應シ得ル地位ニアルモノモアルモ其多クハ然ルヲ得サル次第ナリ而モ現在邦品ノ加フル壓迫ハ到底尋常手段ヲ以テシテハ彼等ハ之ヲ排除シ得サル実情ノ下ニ置カレ彼等ノ自由競争下ニ於テ爲シ得ル努力ハ既ニ其ノ限度ニ達シタルニ近シト見倣シ居リ仍テ既ニ屢々報告シタルカ如ク彼等ハ最早普通ノ対策ノ效果渺キヲ知リ英、伊、佛等ノ如ク當國ニ對シ政治、經濟上ノ實力ヲ有スル國及國人ハ此際出來得ヘクシハ新ニ別ニ非常特別手段ヲ講シテ邦品ニ対抗センコトヲ企圖スルニ至レリ

## (二)埃及国内ニ於ケル對本邦片貿易ノ調整論

埃及ノ經濟及通商關係ハ從來歐米ニ依存シ極東諸國トノ關係ニ寧ロ最近開始ヲ見タルニ過キス從テ同國國民經濟ノ全體ヨリ見レハ商業上ノミナラス財政上經濟上歐米各國トノ交渉ニヨリ支配セラルル所多ク而モ歐米工業国ノ對埃及輸出ノ激減ハ單ニ一商業上ノ問題ニ止ラサル場合モ多キナリ又國產產業ヨリ見レハ歐米トノ競爭ハ彼等ノ斯ク苦痛トセナリ居ル実情ニアリ而シテ右邦品ニ對スル國產工業者及歐米工業国ノ訴ヘハ當國ニ於テモ直接ノ關係者ヲ超エテ既ニ

ノ競爭ニ對シ自己ノ地盤ヲ擁護センコトヲ主張スルノ時期ニ達シ來リタルヲ以テ之レニ壓サレテ自然埃及ノ輿論モ邦品ニ對シ片貿易調節ノ要求ヲ加重スルニ至リ居レリ  
(三)代表來訪直前ノ情勢

前記諸事情ノ他、日埃貿易協会代表ノ當國到着直前ニアリテハ日英綿業會議決裂ノ結果當國ニ對スル英國側ノ壓迫ハ昂マラントスルヤニ一般ニ豫想セラレ且歐洲ニテハ日本品ニ對スル共同戰線ノ必要論各地ニ唱ヘラル趣當國ニ報道セラレ又蘇丹商業會議所及「カイロ」英商業會議所ハ前後シテ總會ヲ開キ各會頭ヨリ日本綿布類ノ進出防止ノ必要ヲ表明セラレタルカ折柄英埃間ニハ重大ナル政治經濟上ノ懸案モ切迫シ又埃及ト佛伊其他治外法權國トノ間ニモ種々ノ新問題發生シ埃及政府トシテハ之カ有利ナル解決ヲ計ル爲ニハ事每ニ英國ノ好意ニ賴ルノ外ナキ地位ニ立テリ他方國內ノ業界ニハ既報ノ如ク邦品取引ノ狀態ニ関シ問屋始メ取扱商人間ニ大ナル不満アリ惡聲市場ニ満チ其ノ結果ノ一部トシテ既報ノ如ク「カイロ」ノ有力問屋(英伊系)ハ自ラ結束シテ一ノ組合ヲ作り之カ矯正ヲ計ルニ至リ仲買人及邦商ノ一部ハ之ト対立シテ一時穩カナラサル形勢モ見エタリ

一般ノ輿論ニ迄影響ヲ及ホシ當國一般ノ邦品進出ニ關聯スル諸問題ニ對スル専心ハ日々ニ高マリツツアルノ形勢ニアリ唯當國ハ富有ナル農業国ニテ特產品タル棉花其他ヲ有スル他絶好ナル其地理的地位ハ大ニ繁榮ヲ助ケ且國民殊ニ農民ハ生活ニ對シ多大ノ伸縮性ヲ有スル結果當國ノ財政及輸出入ハ常ニ調節セラレ當國ハ經濟上他國ニ見サル健全ナル地位ニアリ其ノ財政ハ今日ノ不況ニ不拘尚巨費ヲ投シテ大土木事業ヲ起シ得ルノ余裕ヲ示シ昨年度輸出ハ遙ニ輸入ヲ超過セリ而モ右ハ自然ノ結果ニシテ政府ニ於テ何等ノ人爲的措置ヲ講セサリシモノナリ從テ當國ノ當局及輿論ハ自ラ進ンテ邦品ノ爲メ人爲的手段ヲ講スルノ必要ナク唯關係外國ヨリノ訴アルニ顧ミ之ニ對應スル方策ヲ講シテ右國々ニ對スル從來ノ輸入貿易ノ縮少ヲ防止スルノ必要ヲ感シ居ル迄ナリ茲ヲ以テ目下ノ處國內ノ輿論ハ本邦ニ對シ片貿易調節ニ對スル努力ヲ要求スル程度ニ止リ來リ居レルカ最近ノ形勢ハ益々右關係國ヨリノ要請真剣ヲ加ヘ現ニ伊國、西國、「シリア」等ヨリハ既報ノ如ク種々ナル形ニ於テ屢々強硬ナル交渉アリ「シリア」ノ如キハ現ニ埃及トノ條約ヲサヘ破棄スルノ手段ヲ採リ居リ其他英佛「チエッコ」等モ邦品

## 第一。代表來訪ノ影響及今後ノ棉花購入増加問題

## (一)訪埃ノ目的表明

狀況右ノ如クナリシヲ以テ此等ノ事情ニ應スルカ爲本官ハ代表一行ト相談ノ上其ノ訪埃ノ目的ヲ外部ニ表明スルニ当リテハ(1)日埃協会ノ成立事情ヲ説明シ協会ハ日埃兩國間ノ親交增進ニ貢獻シ且其經濟關係ヲ一層緊密ニスルヲ主タル一般的ノ目的トスルコト(2)之カ爲ニハ我方ハ目下ノ兩國貿易ノ現狀ニ鑑ミ埃及產品ノ輸入ニ努力スヘク殊ニ一行ハ日本ノ綿業家ニ對埃及綿事情ヲ研究シ之力購入増加ニ盡力スヘシ(3)英國トノ關係ニハ一切觸ルルヲ避ケルト共ニ國際協力ノ利益ヲ強調スルコトシ代表一行及本官ハ右方針ニ基キテ種々ノ正式会合ニ於ケル演説乃至會見及新聞紙等ノ發表ニ當ルコトセリ各處ニ於ケル岡田代表及本官ノ演説中ハ右ノ趣旨ヲ敷衍シ居ルハ既ニ報告シタル通リナリ(五月十二日附公第一七四號參照)

## (二)一般輿論ニ對スル反響

棉花ハ埃及ノ主要產物タルノミナラス右ハ埃及カ外國ヨリ確美迅速ニ外國貨幣ノ支拂ヲ受ケ農民ノ外國貨物ノ購入ヲ可能ナラシムル殆ント唯一ノ產品ナリ故ニ棉花ノ賣行如何

ハ直ニ国内ノ全景氣ニ影響ヲ齎スヲ以テ棉花問題ハ當國ニ於ケル他ノ凡ユル商業又ハ企業ニ携ハル一般人ノ日常関心事タルナリ前我名譽領事ニシテ當國塩業ニ從事セル「ロー」氏カ岡田代表及本官ニ談リタル處ニヨレハ塩ノ賣行ノ如キモ棉花ノ輸出ト重大直接ノ關係アリ棉花ノ輸出好轉スルトキハ農民等ノ消費スル塩ノ分量モ比例的ニ増加スト云ヘリ岡田代表及本官等ノ演説、談話其他カ當國一般ニ與ヘタル反響ハ頗ル甚大ナルモノアリ而モ英國側ニ對シテモ一部ノモノヲ除ク他ハ慨々好印象ヲ與ヘタル趣ニテ當國官憲ノ立場ヲ樂ニシ一般輿論ヲシテ本邦トノ經濟關係ヲ尊重重視セシムルニ付多大ノ效果アリタリ當國ノ有識者及業界ノ有力者等ノ多數ハ最近本邦市場ヲ以テ將來ノ好市場ト認メ來リ衷心我國トノ提携ヲ欲シ居レルカ唯四圍ノ關係上本邦側ノ輸入促進ノ努力ヲ希望スルコト前述ノ如クナルモ進ンテ邦品ニ對シ障害ヲ與ヘントスルノ意圖ハ毫モ之ナキナリ此ノ間ノ意嚮ヲ代表的ニ表示シタルハ當地商業會議所會頭「エヒヤ、パシャ」ノ演説ニテ(前記拙信參照)同「パシャ」ハ埃及ハ一方農產物ノ収穫增加ニ伴ヒ新市場ヲ絶対的ニ必要トル共ニ各工業國ノ埃及市場ニ於ケル競爭ノ現狀ニ顧

## ニ心配ナカルヘキ旨語リ居レリ。

代表一行ノ來訪及其目的宣明<sup>(會)</sup>ノ效果カ棉花取引ノ中心地タル當市ニ對シ極メテ甚大ナリシハ勿論直ニ「カイロ」其他全國ニ波及シ好影響アリタリ各新聞紙ノ如キモ擧テ一行ノ來訪ヲ歓迎シ両國間ノ貿易増進ヲ希望シ我國ノ今後ノ努力ニ對シ期待スルコトニ一致セリ(別添ノ新聞切抜及其「レズュメ」ハ右記事ノ一部分ナリ)而シテ是等新聞紙ノ殆ント全部ハ一行ノ訪埃及唯一般的目的ヲ有スルモノナルコトヲ了解シ且一行カ多數官民ト接觸スルコトニヨリ得ヘキ效果ヲ以テ大体満足シ進ンテ貿易問題ニ關シ具体的ノ方策ヲ期待シタルモノハナカリシモ唯「バラーグ」紙ハ在來ノ主張ニモ基キ當局カ進ソテ此好機ヲ促ヘ埃及產品輸出促進ノ方法ヲ講センコトヲ慤懃シタルノミナリ殊ニ注目スヘキハ英國ト特殊關係ニアル「アル、モカタム」紙ヲ始メ國產工業者及英官憲ノ遊擊紙トモ云フヘキ週刊<sup>(1)</sup>「L'Informateur」サヘモ別添ノ如キ友好的態度ヲ以テ一行ノ到着ヲ歓迎報道セルコトナリ尚佛字新聞トシテハ相當發行部数多キ「ラ、ブルス、エデプシエンヌ」紙(佛國保護民タル「シリア」系猶太人經營)ハ一行「カイロ」到着ニ当リ別添ノ如キ效

ミ日本ノ如ク毎年輸入ヲ増加シツツアル國ハ之ニ應シテ埃及棉ノ輸入促進ヲ計リ吳ルルニアラサレハ自國ノ是等工業國ニ對スル棉花輸出ニモ支障ヲ來スヘキ旨述ヘ居レルカ(同「パシャ」カ其際日本ノ進歩ヲ賞讃シ埃及國民ハ日本ノ世界ニ示ス模範ヲ注視スル旨述ヘタルハ當國々内ニ興リツツアル國民的自覺ノ一部ヲ表明シタルモノナリ)更ニ「エヒヤ、パシャ」以上ニ本邦ノ片貿易整調ノ必要ヲ力説シタルハ「カイロ」埃及商業會議所會頭「カタウイ、パシヤ」(本邦ニ好意ヲ有スル人ニシテ銀行其他ノ事業ニ關係ス)ノ演説(別信參照)ナリ同「パシャ」ハ日埃及國ハ大体ニ於テ工業農業國トシテ將來モ併有シ利益關係一致スヘキ國ニシテ両國間ノ貿易關係ハ圓滿タリ得ルモノナシ之カ爲ニハ日本カ片貿易ヲ調節シ相互ノ交換ヲ公平ナラシメ度キ旨述ヘタリ同地ノ商業會議所ハ既ニ報告シタルカ如ク当地ノ會議所ニ比シ一層國內工業家金融業及外國側商人ニ意嚮ヲ反照スルモノニテ大体ニ於テ右「カタウイ、パシャ」等ノ見解ハ當國一般ノ輿論及業界ノ意嚮ヲ代表スルモノト見テ差支ナカルヘシ同「パシャ」ハ從來ヨリ屢々本官ニ對シ邦品ノ問題ハ日本カ極力埃及產品ノ輸入ヲ增進シ行ケハ別

日的記事ヲ掲ケ所謂厭ガラセヲナシタルカ之ニ對シ佛國「ハヴァース」通信社在「カイロ」代表者「ハグロン」氏ハ直ニ本官及岡田代表ヲ來訪シ同記事ハ代表一行ヨリ寄附金入手ヲ目的トシタルモノニテ經營者ハ佛國保護民ナルモ右記事ニ對シテハ在當國佛國公使館ハ勿論佛國民間モ毫末モ関知セサル處ナル旨辯明セリ同紙ハ從來當地在住ノ英人棉花商富豪「フィネー」氏ノ援助ニヨリテ經營サレ來リタルモ最近同氏ハ之ヨリ手ヲ引キタル爲同紙ハ經營難ニ遭ヒ種々ノ惡辣手段ニ出テツツアル由ニテ現ニ「ハーゲンベツク」競馬團ノ「カイロ」興業ノ際モ比種手段ヲ弄シタリトノコトナリ

## (二)邦品輸入業者ノ立場

當市場ハ國際競爭激甚ナル上各國民入り乱レ居レルカ邦品取扱代理店等ノ多クハ猶太人其他ニテ唯便宜上邦品ヲ取扱ヒ居ルニ過キサル上概シテ輕薄、利己的ニシテ節操ニ乏シク政治的社會的ノ地盤ナキヲ以テ稍々モスレハ當國ノ一般的政治上經濟上ノ情勢ニ對シ恐威<sup>(會)</sup>ヲ感シ人氣若クハ一般空氣ニヨリ其活動力ヲ左右セラルルコト多キナリ我方トシテハ當國ニ於ケル我輸出增進方法ノ一トシテモ絕エス努メテ

彼等ニ有利ナル空氣ヲ作り後援ヲ與フル必要アル次第ナル  
カ此方面ニ対シテモ代表一行ノ訪埃ハ良好ナル影響ヲ與ヘ  
彼等ノ地歩ヲ強ムル上ニ效果アリタリ。

## 四今後ノ埃及棉輸入促進問題

四圍ノ形勢前述ノ如ク而シテ代表一行ノ訪埃ノ反響大ナリ  
シ丈ケニ当國官民ノ我方ニ対スル今後ノ期待ハ頗ル大ナル  
モノアルヲ覺悟セサルヘカラス現ニ當國ノ国王陛下カ病後  
ヲ推シテ迄代表一行ヲ引見シ縷々埃及綿花ニ關シ説明セラ  
ルル處アリタルヲ見テモ如何ニ當國カ一行ノ來訪ニ期待ス  
ル處アルカラ推測シ得ヘキナリ

日本ニ於ケル埃及棉ノ使用ハ最近著シキ増加ヲ示シ昨年度  
ニ於ケル埃及ノ植付反別及収獲ノ増加ハ同棉ノ價格ヲ低下  
セシメ一層此形勢ヲ導キタルハ事実ナルカ然レトモ我當業  
者側ニ於テ唯之ヲ自然ノ成行ニ任シ置クノミニテハ今後果  
シテ豫期ノ成果ヲ齎スヤ否ヤ頗ル疑問ナリ我當業者側ニ於  
テモ既述ノ如キ當国内外ノ情勢ヲ良ク了解セラレ此際多少  
ノ犠牲ヲ忍ビテモ進ンテ之カ使用ニ努力シ日埃貿易ノ圓滿  
ナル進行ヲ計ルコトニ助力セラルコト急務ナリ殊ニ本年  
度當國ノ植付反別及収獲ハ從來ノ記録ヲ破ルヘク豫想セラ  
ル

(欄外記入) 本邦ノ本年度購入棉花總量ハ來ル八月末ヲ以テ大体七萬俵  
ヲ突破スヘク豫想セラレ右ハ昨年度ノ五萬一、三千俵ニ比  
シ約四割ノ増加ニテ蓋シ本年度ノ成績トシテハ良好ト云フ  
ヘク右ハ客年十二月始メ日埃貿易協会創立委員会カ當國ニ  
向ヒ宣言シ本官之力周知ニ努力シタル處ト合致スルモノナ  
リ而シテ現在ハ我貿易保護ニ關スル最モ重大時期ニ際会シ  
居ルヲ以テ來ル九月ヲ以テ開始セラル新棉花年度ニ對シ  
テハ是非共近ク適當ノ時期ニ岡田代表一行ノ宣明ヲ事実ニ  
現ハスニ足ルヘキ一方的ノ意思表示ヲナス必要アリ今回ハ  
我方トシテハ尠クトモ九萬俵以上(客年輸入高八割增加)  
ヲ目標トセサルヘカラスト認ム尤モ右程度ノ増加ハ今日ノ

## (別紙)

本發第二〇號

昭和九年三月廿七日

日埃貿易協會

本會代表者埃及國訪問ノ件

拜啓益御清榮之段奉賀候

陳者本會ハ會員各位ノ絶大ナル御贊同ヲ賜リ候結果基礎工

作モ一段落ヲ告げ愈事業ノ第一段階ニ進ム事ヲ得候段御同

慶ノ至リニ不堪候就テハ豫而御報告申上候本會事業ノト

シテ

(一) 本協會代表者ヲ埃及ニ派遣スルコト

(二) 埃及人日本產業視察團ヲ招致スルコト

ニ付其後理事長並ニ常務理事右手カイロ日本商品館長熟議  
ノ上(一)ニ對シテハ會々目下倫敦ニ滯在中ノ岡田源太郎氏  
外四名ガ近ク歸朝セラル、コト、ナレルヲ以テ特ニ其ノ歸

途ニ於テ本會代表トシテ埃及國ヲ訪問シ要路ノ關係者ニ親

敷挨拶會談ヲ乞フコト、シ裏ニ大阪紡績聯合會ヨリ右依頼

方電報ヲ以テ照會シタル所快諾ヲ得候趣ニ付本會ヨリ改メ  
テ正式ニ別紙<sup>(會通)</sup>ノ通り打電依頼致ス事ニ取計申候條御了知相

昭和九年三月二十九日

日埃貿易協會(印)

(付記一)  
本發第二二號外務省通商局第二課長 坂本 龍起殿  
本會代表者埃及國訪問ノ件  
本件ニ關シ別紙之通り會員宛通知致置候條御了知相成度御  
参考迄ニ御通知申上候也

成度右ノ次第ハ外務省ヲ通ジ在亞港北田總領事ニ又カイロ日本商品館ヨリ在カイロ商品館宛電報ヲ以テ通達致置候間御諒承相成度(二)ニ就テハ少クトモ四、五萬圓ノ準備ヲ要スルヲ以テ目下其ノ大部分ヲ理事中有力ナル方面ニ於テ負擔ハ各會員ニ於テ御依頼スル事モ可有之宜敷御願申上候

右御通知旁得貴意候 敬具 擔方依頼中ニ付不日此等方面ノ承認ヲ得タル上ハ一部ノ御負擔ハ各會員ニ於テ御依頼スル事モ可有之宜敷御願申上候

右御通知旁得貴意候 敬具

(付記二)

大發第五號 昭和九年四月貳拾日

日埃貿易協會理事長 阿部 房次郎〔印〕

外務省通商局長 来栖 三郎殿

本協會代表埃及國訪問ノ件

拜啓 愈々御隆昌之段奉大賀候

陳者本協會使命達成ノ第一歩トシテ在英中ノ本邦棉業代表岡田源太郎氏一行ニ對シ歸朝ノ途次特ニ日埃貿易協會代表トシテ埃及國要路訪問方依頼致シ候件ニ就テハ曩ニ御報告申上置候處本日別紙ノ通り代表一行ヨリ電報有之同國官民

要路ト交驩ヲ竭セシノミナラズ特ニ國王陛下ニ拜謁スル等充分其目的ヲ達成シ歸朝ノ途ニ就カレ候次第ニ付御了知被下度此段御報告申上候

記

カイロ發電 岡田代表一行ヨリ阿部理事長宛  
電文

埃及訪問ハ北田總領事ノ斡旋ト同國官民有力者ノ厚志ニ依リ完全ニ交驩ヲ竭シ得タリト信ス 交驩ノ順序左ノ如シ

アレキサンドリヤニ於テ四月十一日官民有力者ヲ訪問

十二日ニハ棉業現物及定期取引商、プレス工場、保税倉庫參觀、晚餐會ニ官民有力者及内外新聞記者百三十餘名ヲ招待ス 總領事ノ挨拶ニ應シ前總理大臣ノ令兄ニテ商業會議所會頭エヒア、パシアンノ懇篤ナル歓迎ノ辭アリ次ニ岡田代表ハ埃及訪問ノ使命、日埃貿易協會設立ノ主旨ヲ述べ、我ガ國ニ於ケル埃及棉ノ消費逐年增加シツ、アル趣ヲ説キ両國間ノ貿易ノ増進センコトヲ希望シ當地ニ於テ受ケタル好意ヲ謝ス、有力者訪問及右演説ハ一般ニ非常ニ好感ヲ與ヘタリ

業者ニ取り利害關係少カラザルニ付御参考ノ爲別紙「石油業法」<sup>(省略)</sup>並ニ「石油業法說明」各壹部茲ニ送付ス委曲右ニ依リ御了知相成度シ

(別紙)

石油業法說明

一、石油國策ノ決定

我國ハ現在主トシテ石油類ヲ外國ヨリノ輸入ニ仰キ今後ト雖モ需要ノ增加ニ伴ヒ益々外國ニ依存スル程度増大セントスルノ狀勢ニ在ルヲ以テ之カ戰時ニ於ケル需給關係ノ安全ヲ圖ルハ勿論平時ニ於テモ國民生活ノ全般的利益ヲ考慮シテ永續性アル液体燃料ノ補給施設ヲ講スルコトノ緊要ナルハ言ヲ俟タス(附屬第一表本邦石油需給表參照)仍テ右問題解決ノ方策研究ノ爲客年六月商工省主催ノ下ニ關係省協議會ヲ開催スルコトトナリ(外務省、陸軍省、海軍省、拓務省、大藏省及内閣資源局之ニ參加ス)同協議會ニ於テ慎重審議ヲ重ネタル結果不取敢大体左記

石油業法ニ關スル件  
265 昭和九年五月二十六日 広田外務大臣より  
在英國松平大使他宛

石油業法の制定について

通一機密合第七四〇號

昭和九年五月二十六日

外務大臣 廣田 弘毅

今般別紙寫ノ通石油業法公布セラレ近ク其ノ實施ヲ見ル豫定ナル處同法ハ本邦ニ對シ石油ヲ輸出シ居ル諸國ノ關係當

方策ヲ講スルコトトシ更ニ審議ヲ續行シ各種方策ヲ攻究シ本邦燃料國策ノ確立ヲ圖ルノ要アリトスル決議ノ成立

ヲ見タリ

(一)石油ノ民間保有ノ増加ヲ計ルコト

(二)石油業ノ振興ヲ計ルコト

(三)石油業用機械器具ノ製造ヲ獎勵スルコト

(四)石油資源ノ確保開發ヲ計ルコト

(五)代用燃料工業ノ振興ヲ計ルコト

而シテ右方策實施ノ爲其ノ四及(五)ニ付テハ夫々不充分乍ラ第六十五議會ニ於テ豫算ノ通過ヲ見目下具体的ニ其ノ實施ヲ進メツツアリ又(一)及(二)ニ付テハ別添石油業法ノ制定ヲ見タリ抑モ本邦ハ其ノ石油資源極メテ貧弱ナルヲ以テ本問題ハ前記四及(五)ノ方策ノ成功ヲ見サル限り根本的解決ヲ爲スコト困難ナル次第ナルカ石油資源ノ確保開發ト云フモ海外資源ハ既ニ各國ノ勢力範圍ニ屬シ我國ノ割込ミ得ル余地乏シク又假ニ割込ミ得ルトスルモ地理的關係其ノ他ヨリ見テ戰時ニ於テ信賴シ得ル資源ト見ルコト能ハサルガ如キ事情等アルヘク又國內油田及樺太油田ハ如何ニ開發スルモ本邦ノ需要額ニ比較スレハ微少ニシテ之ノミヲ以テシテハ到底本問題ヲ解決シ得ルノ見込ナシ尙又代用燃料工業ノ振興ト云フモ「アルコール」ノ使用

係其ノ他ヨリ見テ戰時ニ於テ信賴シ得ル資源ト見ルコト

## 二、石油業法ノ大要

本法ノ目的トスル所ハ石油業ノ振興ト石油ノ民間保有ノ增加トニアリ

石油業振興方法トシテハ石油精製業及石油輸入業ニ付許可制度ヲ實施シ(第一條参照)又其ノ事業計畫ニ於テハ政

ルノ要アル次第ナリ

府ノ認可ヲ要スルコトセリ(第一條参照)但シ本法施行ノ際現ニ石油精製業ヲ營ム者又ハ石油輸入業ヲ營ム者ハ本法ニ依リ許可ヲ受ケタルモノト看做スコトトシ(附則第二項参照)既得權ヲ喪失セシメザルコトトシ尙第二條ノ運用ニ當リテモ成ルベク現狀ヲ尊重シ急激ナル變化ヲ與ヘザル様措置スル方針ナリ

又石油ノ民間保有ノ増加ニ付テハ石油精製業者又ハ石油業者ノ輸入數量ヲ標準トシテ算定シタル數量ノ石油ヲ當時保有セシムルコトナリ居レリ(第五條参照)其ノ數量ニ付テハ近ク制定セラルベキ施行令(勅令)ニ依リ決定セラルル筈ナルガ輸入量ノ一分ノ一トナル見込ナリ尤モ石油ノ保有ニ付テハ「タンク」ヲ設備スル必要モアリ旁々直ニ之ヲ強要シ難キヲ以テ本法附則末項ニ於テ本法施行後六月間ハ其ノ義務ヲ負ハシメザルコトナリ居レリ尙右義務負擔開始後モ漸進的ニ保有量ヲ増加セシ一定期間經過後始メテ年額ノ二分ノ一ニ達セシムル予定ナリ其ノ細則ハ未ダ審議中ニ屬ス

三、石油輸入關係外國商社及條約トノ關係

現在外國人關係商社ニシテ石油ノ輸入ニ從事シ居ル主要

ハ其ノ生産費高キ爲差當リ其ノ實行困難ノ状態ニ在リ又原料ノ供給ニモ限度アリ、「シェール」油、石炭低溫乾溜、石炭液化等モ採算ヲ度外視スレハ格別ナルモ然ラナル限り今日ニ於テハ本邦燃料問題解決ニ足ル程大規模ノ工業的生產ハ不可能ノ状態ニアリ而シテ戰時ニ於テ俄ニ其ノ增產ヲ計畫スルコトモ亦平時ヨリ設備シ置クニ非サレハ其ノ實現不可能ナルナリ(低溫乾溜工業最モ有望ニシテ目下工場設置ノ具体的計畫進捗中ナルモ其ノ副產物タル「コーライト」ヲ何程ノ多量ニテモ有利ニ處分スル方法ノ發見セラレサル限り數十萬屯ヲ生產スルカ如キ大規模ノ工場新設ハ不可能ト稱セラル)從テ本邦トシテハ差當リ四及(五)ニ付其ノ實施ヲ助長スル方策ヲ採リツツ他方之ト同時ニ石油ノ保有ノ如キ姑息的方法モ之ヲ採用スルノ要アル次第ナリ

ハ緊密ナラズ殊ニ佛伊ノ如キハ自ラ輸入割當制度ヲ實施シ居ル關係アルヲ以テ我國ニ對シ抗議シ來ルガ如キコト

萬ナカルベク萬一抗議シ來ルコトアリスルモ我方トシテハ生産ニ付テモ許可制度ヲ實施シ居ルニ付許可制度ヲ

實施スルモ差支ナシト應酬シ得ベシ(石油ハ軍需品ナルヲ以テ例外的取扱ヲ爲シ得ル次第ナリト應酬スルコトモ

得ルヤニ思考セラルルモ如何ナル範圍迄ヲ軍需品ト見ルヤニ付議論ヲ生ズベク又軍需品ノ範圍ヲ余リ擴大シテ解

釋スルコトハ我方ニ取り不利益ヲ及ボスノ虞モアルニ付

軍需品ニ關スル規定ヲ援用スルコトノ可否ニ付テハ尙考

究ヲ要スルモノト思考シ居レリ)

尙英、米、蘭ヨリ萬一抗議シ來ルコトアリタル場合ニハ何レノ國ノ石油ニ對シテモ同様ノ制限ヲ加ヘ居ルヲ以テ最惠國條款ニ違反セズト應酬スル考ナリ

四、輸入許可制度ヲ必要トスル理由

現在本邦ニハ大小ヲ併セテ製油所六十七アリ其ノ原料油處理能力ハ二百四十六萬四千「キロリツトル」ナルガ外

國ヨリ製品カ低廉ナル價格ヲ以テ輸入セラルル爲其ノ壓迫ヲ受ケ昭和八年ニ於ケル原料油處理高ハ百二十八萬三

千百七十六「キロリツトル」ニ過キス其ノ處理能力ニ比較スルトキハ約二分ノ一ナリ

今世界主要都市ニ於ケル揮發油市價ヲ見ルニ時價換算率ニ依ル場合ハ勿論平價換算率ニ依ル場合ニ於テモ本邦石油市價ハ別表ノ如ク驚クヘキ低位ニアリ(附屬第二表世界主重都市ニ於ケル揮發油市價<sup>(値轉)</sup>調參照)

右ハ國內石油業者間ノ競争特ニ露油ノ競争ニ依リ本邦市場カ攬亂セラレタルニ依ルモノナルカ何レニスルモ外國石油ノ供給ヲ必要トスル我國ニ取リテハ低廉ナル石油ノ輸入セラルルコトハ歡迎スヘキ現象ナリト云ハサルヘカラス然レ共斯クノ如キ事態ノ繼續ハ結局本邦石油業ノ發達ヲ阻害スルハ勿論更ニ進ンテハ本邦石油業ノ存立モ危

胎<sup>(若カ)</sup>ナラシムヘク一旦本邦石油業ノ存在セサルニ至ラハ外國石油業者カ「トラスト」、「カルテル」等ノ手段ニ依リ

本邦ニ於ケル石油市價ヲ不當ニ引上クルカ如キ場合ヲ生スルノ虞ナキニ非サルヲ以テ國防上ノ關係ヲ離レ需給關係ヨリ見ルモ百年ノ大計トシテハ斯クノ如キ事態ハ之ヲ

調整シ本邦石油業ノ維持ト發達ヲ計ルノ必要アリト認メラル殊ニ國防上ノ見地ヨリスレハ本邦ニ精製業カ發達シ

油其ノ他製品ノ輸入増加ヲ計ルコト困難トナレルニ付外國會社ニ於テ本邦内ニ精製工場ヲ設立スルノ計畫ヲ立て之ガ許可申請ヲ爲スコトアルベク其ノ許否ニ關聯シ問題ヲ發生スルコトアルベシト思考セラル

抑モ本法律案作成ノ際製油業者ノ資格ニ付キ關係各省ニ於テハ外國人ニ對シテハ製油業ヲ許可セザルコトト爲シ右ニ關スル規定ヲ法文ニ挿入シタキ旨熱心ニ要望スル所アリシガ外務省側ヨリ現下ノ對外貿易及國際關係等ニ鑑ミ慎重考慮スルノ必要アルコトヲ說キ且ツ右ノ如キ外國人排斥ハ日英通商航海條約第一條等ノ商業及製造業ニ關スル内國民待遇ノ規定ニモ違反スルモノナルコトニ付注意ヲ喚起シ内外人ノ區別ヲ爲サザルコトト爲サシメタルモノナリ然レ共製油業ノ許可ニ付テハ石油業委員會ノ議ヲ要スルコトナリ居リ(第八條參照)又出來得ル限り本邦人ニ依ル石油業ノ發達ヲ計ルコト致シ度シトハ一般ノ希望ナルヲ以テ將來外國人ノ支配下ニ在ルガ如キ會社ガ本邦ニ於テ製油業ヲ營マントシ許可ヲ申請シ來ルコトアルモ容易ニ許可ヲ得ルコト能ハザルベシト豫想セラル關係省ニ於テ外國人ノ製油業ヲ排斥セントスル主タル理

#### 五、石油精製關係外國商社及條約トノ關係

現在本邦ニハ大小ヲ併セ製油所七十三アルモ外國會社又

ハ外國系資本ガ一分ノ以上ヲ占ムルガ如キ會社ニ屬スルモノナシ故ニ本法ノ實施ヲ見ルモ直ニ其ノ影響ヲ蒙ル

モノナキ次第ナルガ輸入許可制度ガ實施セラレ將來揮

由左ノ如シ

(1) 外國會社ハ原油ヲ豊富ニ有スル點ニ於テ本邦製油會社ヨリモ優越ナル地位ニアリ其ノ工場設立ヲ許スニ於テハ本邦石油業者ハ競爭ニ破レ其ノ存立ヲ脅威セラルベシ

(2)

外國人ハ本邦人ノ如ク日本國家ニ對シ忠誠ノ觀念ヲ有セズ從テ事變發生ノ場合工場ノ破壊、貯油ノ燒棄等ノ手段ニ依リ本邦資源ノ供給ニ打擊ヲ與フルヤモ知レズ國防上重要ナル製油所ノ如キ機關ヲ外國人ノ支配下ニ置クハ危險ナリ

(3) 外國人ニ事業經營ノ利益ヲ享有セシムルコトハ望マシカラズ

外務省トシテハ右ノ如キ外國人排斥ノ規定ヲ設クルハ現下ノ國際關係殊ニ蘭印等ニ於テ本邦商社ノ活動ヲ抑止セントスルニ對シ我方ヨリ抗議ヲ爲シ居ルガ如キ情勢ヨリ見テ好マンカラズ外國人支配下ノ會社ト雖モ本法ニ依リ充分ノ統制監督ヲ加へ得ベク又其ノ從業員ノ大部分ハ日本トナルベキコト勿論ナルヲ以テ前記(1)(2)ノ如キハ杞憂ト云ハザルベカラズ又(3)ノ點モ貨銀等ハ本邦人ノ手ニ

落ツル譯ナルヲ以テ事業利潤ノ歸屬ヲ問題トスルガ如キハ余リニ偏狹ナル議論ナリト云ハザルベカラズ我國トシテハ却テ外國資本ニ依リ本邦製油業ノ發達ヲ計ルコト望マシキ場合モアルベキコトヲ說キ來レル次第ナリ

右ニ關シテハ將來具体的問題發生ノ場合ニ慎重考慮ヲ加へ善處スルコト致度キ考ナリ

因ニ條約關係ヨリ本問題ヲ考慮スルニ日英通商條約第一條等ニ製造業ニ對スル内國民待遇ノ規定アルモ右ハ自然人ニ對スル規定ニシテ會社ニ對シテハ同條約第十五條ノ如キ規定ニ依リ權力能力カ認メラレ居ルニ過ギズ營業ヲ許可スルト否ハ別問題ニシテ他ノ外國ニ對シテモ同様ノ制限ヲ加フルモノナル限り條約ニ違反スルコトナシト立論スルコトヲ得ルモノト思考ス尤モ此ノ議論ニ付テハ本邦人ノ海外活動モ主トシテ會社組織ニ依リ行ハレ居ルコト、蘭印ニ於ケル本邦輸入業者ニ對スル壓迫ガ現ニ問題トナリ居ルコト等ノ事情ニモ鑑ミ慎重考慮ヲ要スベク此ノ際我方ヨリ此種ノ議論ヲ爲スコトノ可否ニ付テハ更ニ慎重ナル研究ヲ遂グルコトヲ要ス

尙右議論ヲ以テスルモ自然人タル外國人ニ對シ製油業ノ

許可ヲ拒否シ一方内國人ニ對シ製油業ノ許可ヲ與ヘタル場合日英通商條約第一條違反トナルベキヤ否ヤノ問題ヲ

生ズル次第ナルガ今後外國ヨリ原油ヲ輸入シ製油業ヲ營マントスルモノニ付テハ總テ一定限度以上ノ規模ヲ有スル製油所タルコトヲ必要條件トスル豫定ニシテ右規模ノ設備ヲ有スル爲ニハ資本金モ數百萬圓ヲ要スル趣ナルニ付キ實際問題トシテハ右企業ハ總テ會社ニ依リテ行ハルルコトナルベク從テ自然人ノ製油業ハ問題トナラザルベシ

六、製油業許可制度ヲ必要トル理由

製油業許可制度ヲ採用スルニ至レル理由凡ソ左ノ如シ

(1) 製油業ノ健全ナル發達ノ爲ニハ需給關係ヲ考慮シ適當ナル監督ト統制トヲ加フルコト必要ナルモ自由營業ニテハ右統制ヲ期待シ難キコト

(2) 保有義務ヲ負擔セシメ其ノ履行ヲ確保スル爲許可制度ヲ實施スルノ要アリト認メラルコト

(3) 本邦ニ於テ揮發油ハ現在五五%迄外國製品ノ輸入ニ俟ツ狀態ニシテ同品製造ノ助長ヲ必要トル所之カ爲ニハ製油業ヲ許可制度トシ揮發油製造ニ適スル設備ヲ有

スルコトヲ許可ノ條件トスルコト時宜ニ適スト思考セラルルコト

七、石油業法施行令

本法第一條、第四條、第五條等ニ於テ細目ノ規定ヲ勅令ニ讓リ居ル處近ク石油業法施行令ヲ制定シ大體左記ノ如キ事項ヲ定ムル見込ナリ

(一) 石油精製業及石油輸入業ノ定義

(二) 石油精製業ノ許可條件

(三) 石油ノ需要供給ヲ參酌シ石油業確立上支障ナシト認メタル場合ニ非サレハ許可ヲ爲スコトヲ得サル旨ノ規定

(四) 輸入許可ヲ必要トル石油ノ種類

(五) 輸入許可ヲ必要トセサル例外ノ場合

(六) 保有ニ關スル細則等

右ノ中(二)ニ付テハ内地原料油ヲ使用シテ製油ヲ爲スモノニ付テハ別段ノ制限ヲ設ケサルモ外國ヨリ原料油ヲ輸入シテ製油業ヲ營ムモノニ付テハ一定ノ設備ヲ爲スコトヲ要ストノ規定ヲ爲スコトナルモノト豫想セラル、右規定ハ内外人總テニ同様ニ適用セラルモノナルヲ以テ日

英通商條約第一條等ノ内國民待遇ノ規定並ニ諸條約中ノ最惠國條款ニハ抵觸スルコトナキモ内國原油ニハ設ケサル制限ヲ外國原油ニ設クルモノナルヲ以テ日佛通商條約第六條ノ如ク輸出入ノ自由ヲ保障スル規定ニ關聯シ輸入ヲ間接ニ制限スルモノナリトノ議論ヲ惹起スルノ餘地ナキニ非ス然レ共通商條約ニ於テ右種ノ規定ヲ有スル國ハ本問題ニ付緊密ナル利害關係ヲ有セス又自ラ各種ノ制限措置ヲ採用シ居ル事情アリ又右設備ハ實際上大體ニ於テ製油業ヲ經濟的ニ經營スル爲ニ必要ナリト認メラル最低限度ニ之ヲ定メントスルモノニシテ外國原油ノ輸入ヲ抑止スル性質ノモノニ非サルニ付右ノ點ニ關シ事實上外國側ヨリ何等抗議ヲ提出シ來ルカ如キコトハ萬無カルヘク假ニアリトスルモ事實上外國原油ノ輸入制限トナラサルコトヲ説明スルニ於テハ其ノ諒解ヲ得ルコト困難ナラサルヘシ

## 八、結論

之ヲ要スルニ本法律ハ燃料國策ノ見地ヨリ制定セラレタルモノニシテ嚴格ナル條約ノ解釋論トシテハ多少疑義ヲ生スル點ナキニ非スト雖モ現在諸外國ニ於テ採用シ居ル

266

昭和9年5月29日

在アルゼンチン山崎(次郎)公使より  
広田外務大臣宛(電報)

本邦および極東市場開拓のためアルゼンチン  
産品輸入為替を公定率にするとの同國農務次官の談話について  
本 省 6月19日後6時0分発  
ブエノス・アイレス 5月29日前發  
本 省 5月30日前着

## に鑑み同國の為替管理緩和申入れ方訓令

本省 6月19日後6時0分発

## 第四一號

## 貴電第六九號ニ關シ

近來輸入爲替ノ決済難澁ヲ極メ在留邦商ノ蒙ル打擊鮮カラサルヲ觀取シタルヲ以テ之カ打開策考究ノ爲過日農務次官ヲ往訪懇談ヲ試ミタルカ同次官及亞國當局ハ新市場開拓ノ見地ヨリ日本及本邦ヲ仲介トシテノ極東市場ヲ重要視シ本邦ニ於テ亞國物產ヲ積極的ニ購入シ且支那其ノ他ノ市場ヘノ亞國製產品ノ進出ニ仲介ノ勞ヲ執ルニ於テハ現ニ英國ニ與ヘ居ルト同様ノ便益即チ亞國ヨリノ購入額ノ八割九步乃至九割ニ相當スル額ノ輸入爲替(公定率ニ依ル)ノ許可ヲ與フ可シト言明セリ本件成立ノ曉ニ於テハ本邦ハ英國ト同一ノ立場ニ立チ本邦品ノ當地進出激増ヲ豫想シ得ルニ付此ノ機ヲ逸セス本邦側ニ於テ具体案ヲ作成セラレ結果御電報アリ度ク尙本件ノ如キ重要問題ニ對シテハ當地邦商ハ徒ニ自己ノ利益ニ拘泥シ確タル意見立チ難キ有様ナルニ付關係内地輸出入商ニ於テ統制ヲ立ツル様併テ御配慮煩ハシ度シ

~~~~~

267 昭和9年6月19日 広田外務大臣より
在アルゼンチン山崎公使宛(電報)

我が方におけるアルゼンチン產品の購入獎励

各種輸入防遏手段ニ比較スレハ寧ロ寛ナルモノト云フコトヲ得ヘク又其ノ運用ニ當リテモ外國會社ニ對シ急激ナル打擊ヲ與フルコトナキ様注意スル方針ニシテ精製品ノ輸入ニ付テハ將來漸減ノ傾向ヲ生スルコトアルヤニ思考セラルモ其ノ場合ニハ原油ノ輸入増加スヘキヲ以テ必シモ外國關係業者ニ大ナル損失ヲ及ホスコト無カルヘク或ル意味ニ於テハ本邦市場安定ノ爲却テ外國會社ニモ有利ナル點アル次第ナリ

編注 本信は、在英國大使、在米國大使、および在オランダ公使など計十七の關係在外公館長宛に送付された。セラルモ其ノ場合ニハ原油ノ輸入増加スヘキヲ以テ必シモ外國關係業者ニ大ナル損失ヲ及ホスコト無カルヘク或ル意味ニ於テハ本邦市場安定ノ爲却テ外國會社ニモ有利ナル點アル次第ナリ

一、過般ノ日濠通商ニ關スル彼我談合ニ於テハ我方ハ各國ヨリ輸出入均衡ヲ迫ラレ居ル結果已ムヲ得ス濠洲ノ如キ著シキ當方ニ不利ナル片貿易ヲ或程度迄調節スルニ力メサル可ラサル事情ヲ説明シ濠洲高率關稅緩和方ヲ要求シ先方ハ羊毛ニ對スル本邦關稅據置ヲ希望スル所アリタルカ未タ何等具体的協定ノ次第ナク右ハ何レ近ク開始ノ豫定ナル通商條約交涉討議ノ對象タルヘシ

二、本年四月末日迄ノ本邦對「ア」貿易額(單位千圓)ハ輸出三、〇八七輸入六、六六八ニシテ右様著シク入超ニ轉シタルハ主トシテ「ア」國羊毛買付ニ對スル本邦商社ノ積極的活動ニ因ルモノニシテ企期間ノ輸入金額五、三四八(四、三五七、九〇〇斤)ニ達セルカ(客年一杯ノ輸入一、二四七(三、〇九一、八〇〇斤)當業者ノ觀測ニ依レハ來年度ノ本邦買付量ハ本年度ヨリモ更ニ著シク增加ノ見込ナリ將又「ア」國小麥ニ付テハ目下米國品加奈陀品等カ

割安ナルノミナラス本邦ヘノ輸送日数(六十日)カ右他國品ニ比シ頗ル長キ爲其ノ期間ノ爲替變動危險率ヲ見込ム

ノ要アリ旁々現在ハ其ノ輸入困難ナル事情ニアルモ相場次第二テ可能ナル趣ナリ右様政府ニ於テハ本邦當業者ヲ

督勵シ「ア」國產品ノ購入方努力セシメ居ル次第ナルニ付(三)菱ノ責任國駐在員(名十四日出發セリ)貴官ハ「ア」

國當局ニ對シ右ノ諸點ヲ御説明ノ上爲替官理^(管)ノ緩和ニ付至急適宜ノ措置ニ出スル様御申入相成度シ

三、尙「ア」國市場ヲ對象トスル輸出組合曰下設立手續中ノ處之カ成立ノ曉ニ於テモ全輸出組合ト輸入業者トノ間即輸出ノミヲ行フ中小輸出業者ト輸出ト輸入トヲ兼營スル

貿易業者トノ間ニ爲替ノ融通ヲ實行セシムルコトニ付相當困難アルヘキヤニ思考セラル、關係モアルニ付貴電第

五八號御來示ノ次第二付テハ差當リ左ノ通御措置相成様致度シ

(イ)「ア」國品ヲ輸出スル各個ノ日本商社ニ對シ「ア」國政府ハ其ノ輸出額ノ十割ニ相當スル輸入爲替(公定率ニ依ル)ノ許可ヲ與フルコト

(ロ)「ア」國商品ノ輸出先ハ極東市場ト限定セス無制限ト

スルコト

(ハ)與ヘラレタル輸入爲替ニ對スル本邦品ノ品種ニ制限ヲ附セサルコト

(二)「ア」國政府ハ日本商社カ其ノ許可セラレタル輸入爲替ノ割當ヲ第三者タル本邦對「ア」輸出業者ニ讓渡シ得ルコトヲ承認スルコト

(三)輸入爲替ノ豫約及自由市場率ニ依ル本邦對「ア」輸出手形ノ決済ハ從來通ナルコト

(イ)追而輸出スル「ア」國產品ノ品種ハ貴電第一三號ノ重要輸出品ニ限定セラル、ヤニ思考スルモ或ハ無制限カトモ考ヘラル、ニ付御確メ相成度シ

~~~~~

268 昭和9年6月27日 在アルゼンチン山崎公使より  
広田外務大臣宛(電報)

我が方に対する為替率を九割とするとのアル  
ゼンチン側意向について

ブエノス・アイレス 6月27日後發  
本 省 6月28日前着

第七五號(亞國爲替管理ノ件)

貴電第四一號末段御來示ノ諸點ニ關シ當方ノ所見左ノ如シ

(イ)往電第五八號ヲ以テ申進タル通り亞國當局ハ英國ト同様八割九分乃至九割ヲ許可スルコトニ内定シ居リ通商審查會ノ報告ヲ待テ確定スル筈ナリ右ハ貴電第二項御申越ノ事實竝ニ本邦投資利子ノ送金皆無等ノ事實ヲ指摘シ在亞

貿易協會並ニ本使カ亞國當局ニ累次懇談ノ結果ナリ過日日亞通商審查委員並ニ農務大臣招待晩餐會ニ於テモ農務大臣ハ右九割ノ許可ヲ與フヘシト言明セリ加之本使ハ先般來當地貿易協會ノ意見ヲ徵シタルニ目下ノ所右九割ノ許可ヲ得ルニ於テハ日亞貿易進展上支障ナシトノコトナリシヲ以テ大体右ヲ根據トシテ前記通商審查委員會トモ聯絡ヲ保チ最小限度九割ヲ獲得シ度キ旨ヲ述ヘ置キ同委員會モ其ノ含ニテ政府ヘノ報告書ヲ作成シ居ル關係上貴電十割ノ主張ハ貫徹ノ見込ナシ

(ロ)亞國商品ノ輸出先ヲ極東市場ト限定セサル時ハ輸出先ノ國トノ貿易トナリ爲替管理上ノ特惠ヲ得サルコトアルヘク特ニ亞國カ極東市場開拓ノ爲ニ本邦ニ對シ九割ノ許可ヲ與フヘシト云フ理由ヲ失フ結果ヲ生ス

(ハ)亞國ハ從來輸入爲替ニ對スル本邦品ノ種類ニ何等ノ制限

(ア)許可セラレタル輸入爲替ノ分配讓渡等ハ邦商間ノ申合又ハ協定爲スヘキ事柄ニテ亞國當局ヘ申入ルヘキ筋合ノモノニ非サルヘク在留貿易協會ニ於テハ九割獲得ノ場合ハ約七割五分ヲ輸出者ヘ約一割五分ヲ輸入者ヘ割當ルコトニ決定シ居レリ

(イ)輸入爲替ノ豫約及自由市場率ニ依ル輸入手形ノ決済ハ亞國市場ニ於テ一般ニ認メラレ居ル處ナルヲ以テ右ニ關シ亞國當局ノ言明ヲ要求スヘキ問題ニ非ス

(ロ)輸出ニモ亞國產品ノ種類ニ付亞國政府ハ未タ何等ノ制限ヲモ申出シタルコトナキヲ以テ目下ノ處右ヲ取立テ問題トスル要ナシ

以上御來示ノ諸點ハ亞國當局ニ申入ルモ何等ノ實益ナキ問題ニテ當方ノ要望スル所ハ斯ノ如キ措置ニ非ラスシテ現實ニ如何ナル方法ニ依リ如何ナル亞國產品ヲ如何ナル程度迄日本及極東市場ニ於テ買進ムコトヲ得ルヤノ點ナリ現ニ獨逸ハ本月十八日亞國ト爲替決済ニ關スル協定(詳郵報セリ)ヲ爲シ亞國產品ノ輸入ニ付所定ノ輸入割當以外ニ一千萬馬克ノ追加輸入許可ヲ亞國ニ與ヘ亞國側ハ右買付ニ準

シテ輸入爲替許可ヲ與フルコトナリタルカ如キハ有力ナル参考材料ナルヘシ御参考迄

ノ本邦輸入増進方ヲモ研究スルニアルニ付相手國ニ於テ同官視察ノ目的ニ誤解ヲ抱クコトナキ様前記ノ點篤ト御含置ノ上

269 昭和9年7月25日 広田外務大臣より 在ブラジル(久治郎)大使宛(電報)

首藤商務書記官の中南米諸国調査目的につき

当事国に説明方訓令

付 記 五月二十一日付通商局第二課起案高裁案(六月七日決裁)

「大使館商務書記官首藤安人中南米諸國出張方ノ件」

本省 7月25日後3時20分発

第一三號 首藤商務書記官經濟事情調査ノ爲八月中旬横濱發九月上旬

「メキシコ」ヨリ中南米諸國視察ノ後  
(一)十月下旬「ペルー」約一週間智利經由十一月中旬「アルゼンチン」約二週間全月下旬「ウルグアイ」約三、四日十二月上旬「ブラジル」約二週間視察ノ豫定ナルカ其目的ハ必スシモ本邦品ノ販路擴張ノミニ存セス視察國商品

(付記) 昭和九年五月二十一日起草 同 年六月 七日決裁  
高裁案

大使館商務書記官首藤安人中南米諸國出張方ノ件

日本對中南米諸國通商關係ハ彼我言語ノ關係、交通ノ不便金融機關ノ不備、市場研究ノ不充分等諸般ノ事由ニヨリ從來微々トシテ振ハザリシガ輓近廉價良質ナル本邦商品ノ同方面ヘノ進出ハ顯著ニシテ中南米諸國ヲ合セ昭和五年我輸

出一千餘萬圓ニ對シ昭和八年ニ於テハ四千六百萬圓ニ激増セリ(輸入昭和五年七百萬、昭和八年千三百萬圓)

近年我海外貿易ガ各方面ノ市場ニ於テ幾多ノ障礙ニ逢着シ邦品進出ノ機運抑制セラレツツアルヤ我貿易業者ハ逸早ク從來餘り關心ヲ有セザリシ中南米ノ新市場ニ着目シ殊ニ昨夏來旅商團ノ派遣セラルアリ又商事會社社員ノ出張視察スルモノ急増シ同方面ニ對シ異常ノ積極的活動ヲ開始スルニ至レリ

然ルニ之等諸國ハ概ね爲替管理ヲ施行シツツアルヲ以テ常ニ輸出超過片貿易ノ狀況ニアアル我方トンテハ輸出代金ノ固定トナリ自然輸出促進ノ勢ヲ殺ガルルノ結果ヲ來タシタルガタメ茲ニ之等諸國物資(主トンテ原料食料品)ノ輸入ヲ増進シ以テ貿易尻ノ均衡ヲ計ルノ必要ヲ來タセリ曩ニアルゼンチン、ブラジル、ウルグアイ等ノ諸國ガ各其物產ノ販路ヲ東洋市場ニ求ムル等彼我經濟關係增進ノ使命ヲ有スル者ヲ本邦ニ特派セル如キ彼等亦我國ニ對シ多大ノ關心ヲ有スルニ至レリ

由來中南米諸國ノ市場ハ英、米獨諸國商權爭奪ノ地ニシテ同方面ニ對スル我方商勢ノ伸暢ハ國際經濟關係上極メテデ

(別表)

中南米諸國出張旅程概要

横濱—桑港(五日)—メキシコ(五日)—ガテマラ(五日)—サルバドール(五日)—ホンデュラス(五日)—ニカラガ(五日)—コスタリカ(五日)—パナマ(五日)—コロンビア(十五日)—ブエネヅエラ(十五日)—ハイチ(五日)—サンドミンゴ(五日)—キューバ(五日)—(ハバナヨリ汽船ニヨリ)コロンビア太平洋岸ベナベンツラ(二日)—エクアドル(二日)—ペルー(五日)—智利(七日)—アルゼンチン、ブエノスアイレス(十五日)—ウルグアイ(五日)—ブラジル(サンパウロ及リオ)(十五日)—此地ヨリ航空路ニヨリキュバニ到リニユーオルレアンスヲ經テ羅府ヨリ乗船シ横濱ニ歸着

(付 箋)

(會計課意見)

本件出張旅行日数ハ高裁案ニハ約五ヶ月トアルモ主管課提出ノ別添旅程概要ニ依レハ二百日以上ニ達スヘク今假ニ之ヲ百六十日ト見積り計算スルモ二万五千円以上ノ旅費ヲ要ス而シテ通商振興費豫算中ノ旅費ハ八千五百円ヲ計上シアルニ過キサルノミニラス右旅費ハ波斯ヲ始メ十七公館ノ通商調査旅行費(一館平

270 昭和9年8月15日 広田外務大臣より  
在アレキサンドリア北田総領事宛(電報)

連盟脱退後の委任統治地域における我が方通

商均等待遇確保のため関係国との個別条約締結方針につき関係当局の意向探査方訓令

第三〇號 本省 8月15日後7時発

往電第二九號ニ關シ  
主タル同盟及聯合國ノ一トシテ舊敵國ノ海外屬地ニ關スル權利ノ讓渡ヲ受ケタル本邦ハ(對獨和平條約第百十九條參照)聯盟脱退完了後ト雖モ委任統治地域ニ於テ他ノ聯盟國

ニ劣ル待遇ヲ受クヘキ筋合ノモノニ非スト思考スルモ受任國中聯盟規約及委任統治條項ノ規定ヨリ聯盟離脱ト共ニ通商均等待遇ノ保障ヲ失フモノナリトノ解釋ヲ採用シ本邦品ニ差別待遇ヲ加フルニ至ル虞大ナルモノアルハ御承知ノ通ナルニ付米國カ受任國ト夫々條約ヲ結ヒ其ノ權益ノ確保ヲ計リタル先例ニモ鑑ミ事前均等待遇ノ確保ヲ計ルタメ關係受任國ト夫々個別的ニ交渉シ條約ヲ締結スル方針ヲ以テ折角準備研究ヲ進メ居レリ就テハ御出張中關係當局ノ意向ソレトナク「サウンド」ノ上結果御報告相成度ク尙前記含ヲ以テ關係當業者ヲ可然御指導相成度シ  
参考ノ爲英、佛、白、及ヒ「モンバサ」ニ轉電アリ度シ

271 昭和9年8月22日 在モンバサ茂垣(長作)領事代理より  
広田外務大臣宛

連盟脱退後の東アフリカ地域における我が方

通商均等待遇確保のためコンゴ盆地條約存続

方意見具申

場七個、江商ハ印度人名義ニテ二個ヲ有シ一工場當り收益約七、八萬志ニ達セル趣ナリ

右邦商ノ確乎タル地盤ハ過去十年ニ亘ル奮闘努力ノ賜物ニシテ右地盤ハ將來當方面ニ我商權ヲ擴張スル上ニ於テ是非共擁護セザルベカラザルモノト思考ス、之ニ對シテハ貿易相互主義ニ基キ是非共東阿產物資ヲ買付ケザルベカラザル事情ニアリ

豫テ御承知ノ如ク當地方ハ「コンゴー」盆地條約ト「タンガニカ」委任統治地ニ關スル聯盟規約ニ基キ貿易上機會均等ノ保障アリ英帝國內本邦品輸入割當實施ニ不拘當地方ノ關スル限り流石ノ英國モ邦品ニ對シ差別待遇ノ方策ナク目下比較的ニ惠マレタル事情ノ下ニアリ、現在ノ處我方年額輸出六十三萬三千七磅(一九三三年)ニシテ市場トシテハ大ナリト稱スルコト能ハザルモ將來土人購買力ノ增進ト共ニ我方貿易ノ發展ハ充分ニ期待シ得ベシ左レバ現在ノ處比較的小市場ナリト雖モ飽迄之ヲ擁護セザルベカラザル必要ニ逼リツツアリ、明年三月末聯盟脫退完了ト共ニ受任國ニ於テ聯盟規約並ニ委任統治條項ヲ権ニ我商品ニ對シ差別待遇ヲ加ヘントスルモ「コンゴー」盆地條約ノ嚴存スル以上

「タンガニカ」ノ關スル限り何等懸念ナキ次第ナルヲ以テ前顯盆地條約ハ飽ク迄存續ニ向ツテ奮闘セザルベカラザルモノト思考ス、「ランシマン」聲明實行途上ノ障礙トシテ英國政府ハ盆地條約ヲ厄介視シ居ル事情ニアルニ鑑ミ適當ノ口實ダニアラバ該條約中ニ廢棄條項ノ缺如セルニモ拘ラス之ヲ失效セシメントノ作奪ニ出ズベク我方トシテハ他關係約國ヲ動カシ之ヲ阻止シ盆地條約ノ存續ヲ死守セザルベカラズト思惟ス、勿論本件外交上ノ工作ハ夫々御措置中ト拜察スルガ萬一存續不可能ノ場合我方將來ニ及ボス損失ハ蓋シ測ルヘカラサルモノアリ此ノ意味ニ於テ來年度ハ當方面亦正ニ文字通り非常時下ニ晒サルモノト云フヘシ本件ニ關スル當方面「ローカル」措置トシテハ貿易關係ヲ相互的基礎ニ整調シ益々密接ナラシムル以外方法ナキヤニ思考セラル即チ必要ノ場合ニハ「ウガンダ」棉花、「ケンヤ」書達等ヲ政策的ニ買進ミ貿易尻ヲ改善シ同時ニ綿布、綿製品、人絹、雜貨等ノ大々的進出ヲ計ラサルベカラズ、當方面產物ハ前顯ノ棉花、曹達以外珈琲、「サイザル」「ワツツルパーク」皮革、「メイズ」其ノ他何レモ且下ノ處見本的小取引以外何等引合行ハレス是等ハ相當時ヲ要スヘキヤ

ニ思ハルヲ以テ盆地條約廢棄防止策トシテノ物資買付ハ棉花及曹達ニ集中スル外ナカルヘシ

次季棉花植付ハ既ニ終了作柄其ノ他ノ豫想ハ目下ノ處困難ナルカ大体三十萬俵見當ノ產額ナルヘシトノ事ニテ取引開始ハ一月上旬ノ見込(一月九日ト豫定セラル)干魃減退ノ影響ニ依ル米棉高ニ見當業者ハ來季ヲ樂觀シツツアルヲ以テ市況ニ變動起ラザル限り邦商ノ次季活動ハ一段ノ進歩ヲ見セルモノト想像セラルガ萬一市場關係ニ變化發生シ買付不利ノ事態發生ノ場合ナキヲ保セズ然ル場合ニ於テハ去ル

一九三一年及三二年度ノ如ク買付杜絕ノ狀態ヲ誘致スベクスクテハ盆地條約改廢問題必然的ニ矢釜シカルベキ情勢ニ當面シ甚ダ不利ヲ招來スベク萬一ノ場合ニ備フル爲メ本件具体對策ヲ商工省、紡績聯合會、綿業組合、商船會社等ト豫メ御協議置キ相成ル様致度シ

曹達ニ關シテハ最近本邦曹達工業ノ發達ト共ニ「マガチ」曹達ヲ從來ノ如ク必要トセザル趣ナルガ本件モ考量ノ餘地アラバ可成從來程度ノ買付ヲ維持シ度ク「マガチ」曹達ハ本邦向輸出杜絕ノ場合ニハ死滅ノ運命ニアリ我方トシテハ謂ハバ生殺<sup>(寅カ)</sup>奪ノ權ヲ握リ居ル狀態ナリ

第一六九號

### 政府よりの調査依頼について

272 昭和9年9月26日 在ブラジル内山臨時代理大使より

旅行後(一月廿五日出發ノ豫定)改メテ申進ムル考ナリ

本信寫送付先 在英、佛、白、葡各大公使

「ケープタウン」

「アレキサンドリア」

リオ・デ・ジャネイロ 9月26日後発  
本 省 9月27日前着

### 本邦へのブラジル産綿花輸出促進につき同国

伯國政府ハ目下對本邦輸出促進方ニ付攻究中ノ處差當リ棉花ニ關シ左記ノ點查報方外務省ヨリ依頼アリタルニ付右御取調ノ上回電請フ

一、本年上半期並ニ最近迄ノ本邦輸入原棉數量  
二、同上期間印度及米棉ノ各本邦輸入數量及同下半期ノ右輸入見込數量

三、印度、米國及伯國棉ノ本邦渡シ平均値段比較

十八日ノ税關渡百斤ノ値段左ノ通

印棉(Akola)

四一圓五〇錢

米棉(Strict middling)

六六圓五〇錢

伯國棉(品質平均)

六五圓

### 我が方ブラジル産綿花輸入状況について

本省 9月28日後6時40分発

貴電第二六九號ニ關シ  
第一四〇號

一、上半期及八月迄ノ輸入總量二、四一六、三一七俵及三、

二、印棉ノ上半期及八月迄ノ數量ハ一、一三三、一四八俵及

一、五八四、三〇〇俵(一億四百封度)

米棉 同上、九八二、三三四俵及一、二二三、九一四俵

(一億五百封度)

尙印棉及米棉ノ新棉出廻期ハ各々十月及九月ナル爲九月以降ノ輸入數量ハ目下ノ處豫測困難ナルモ客年度ニ於ケル原棉ノ總輸入量ハ三、四五〇、〇九四俵ニシテ内印棉一、二八九、〇四五俵米棉一、七一八、六六〇俵ナリ  
三、印棉及米棉ノ種類多岐ニ分レ平均値段算定困難ナルモニ

273 昭和9年9月28日 広田外務大臣より  
在ブラジル内山臨時代理大使宛(電報)

シリアにおける連盟脱退後の邦品への最高税

率賦課への対応につき意見具申

商機密第二九六號 昭和九年九月廿八日

在トルコ本(重志)大使館商務書記官より

シリアにおける連盟脱退後の邦品への最高税

率賦課への対応につき意見具申

(10月18日接受)

在イスタンブル 外務大臣 廣田 弘毅殿 商務書記官 本 重志(印)

國際聯盟脱退後ニ於ケル「シリア」國輸入邦品輸入稅率ニ關スル件

明年三月我國ノ國際聯盟脱退後ニ於ケル「シリア、レバノン」共和國向邦品ノ輸入稅率ハ、同國關稅法ノ規定ニ從ヒ、最高稅率ヲ以テセラル、コトナルヘク、事前ニ適當ノ處置

ヲ講スル様、同國各地邦品輸入商ノ希望アルコトハ曩ニ拙信商機密第二六〇號ヲ以テ報告シオキタル所、今回更ニ

「アレツボ」邦品輸入商ヨリ照会ニ接シタリ

本件ニ付テハ北米合衆國ノ如ク聯盟不參加國ガ「シリア」

國輸入稅率ニ關シ、最惠國待遇ヲ受ケオル例モアリ、我國

モ亦北米合衆國ノ例ニ慣ヒ「シリア、レバノン」國當局ト

ノ間ニ同様ノ協定ヲ行フコト不可能ナラサルヘシト存セラ

ル 尚コレカタメ必要ナル交渉ハ、曩ニ在仏國帝國大使館ノ報

告ニ徵スルモ、直接「シリア、レバノン」當局ト行ハルヘ

キ要アルカ故、同國ニ最便宜ナル在埃及帝國總領事又ハ在

土帝國大使ニ於テ行フコト最好都合ナルヘシト思考セラル

右何等御参考迄報告申進ス

本信附屬書簡

在「アレツボ」市「ロレンソ・マナシ」來信寫(省略)

本信寫送付先

在埃及帝國總領事

以上

274 昭和9年9月28日 在トルコ本(重志)大使館商務書記官より  
在廣田外務大臣宛

シリアにおける連盟脱退後の邦品への最高税

率賦課への対応につき意見具申

(10月18日接受)

在イスタンブル 外務大臣 廣田 弘毅殿 商務書記官 本 重志(印)

國際聯盟脱退後ニ於ケル「シリア、レバノン」共和國向邦品輸入稅率ニ關スル件

明年三月我國ノ國際聯盟脱退後ニ於ケル「シリア、レバノン」共和國向邦品ノ輸入稅率ハ、同國關稅法ノ規定ニ從ヒ、最高稅率ヲ以テセラル、コトナルヘク、事前ニ適當ノ處置

275 昭和9年10月19日 広田外務大臣より  
在英國松平大使宛(電報)

連盟脱退後のアフリカ地域における我が方通

商均等待遇確保のためコンゴ盆地條約の存続

希望につき関係國の意向探査方訓令

第二九七號

本省 10月19日後4時0分発

「コンゴー」盆地條約ハ我對阿輸出貿易上極メテ重要ナル

役割ヲ演シ居ルコトハ御承知ノ通ナル處明年七月改訂ヲ議

スルコトトナリ居ル關係上目下折角對策考究中ナリ我方ト

シテハ同條約ハ其ノ儘存續致度ク從テ一九三〇年ノ場合ト

同様改訂延期トナルコトヲ希望シ居ル次第ナルニ付右御含

ヲ以テ我方ヨリ積極的ニ勵キカクルコトハ之ヲ避クルコト

、致度モ關係國ノ意向豫メ承知致置タキニ付何等カノ機會

ニソレトナク御探りノ上結果電報アリ度シ

佛、白、伊、葡、米ヘ本大臣訓令トシテ轉電シ、「アレキサンドリア」、「ケープタウン」及「モンバサ」へ參考トシテ轉電アリ度シ

276 昭和9年11月1日 在独国杉下臨時代代理大使より  
機密第三四三號 広田外務大臣宛

日独貿易に関する今後の方針につき稟申

(12月11日接受)

昭和九年十一月一日

在独

臨時代理大使 杉下 裕次郎(印)

外務大臣 廣田 弘毅殿

我對獨取引ニ關シ稟申ノ件

一、爲替資金極度ノ缺乏ニ依ル當國現下ノ爲替及商品管理ノ下ニ於ケル我對獨取引ノ維持促進策ニ關シテハ累次商務官ヨリノ報告ニ依リ御承知ノ通リナル處永井大使御歸朝ノ際外務次官ニ對シ日本ハ未タ日獨間ノ「クリアリング」協定ヲ要求セサル處獨逸現在ノ爲替管理及輸入許可制ニ依リ事實我取引カ不利益ヲ受クルニ於テハ我方トシテ各方面ニ「クリアリング」實施ノ主張起ルハ避ケ難カルヘシ然レトモ日獨兩國ハスル複雜且不便多キ制度ヲ可成避クルヲ兩國ノ爲メ可トスヘキニ付獨逸側トシテ日本ノ取引ニ充分便宜ノ取扱ヲ與ヘラレ度キ旨述ヘラレタルニ對シ次官ハ同感ヲ

二、商務官ノ内査ニ依レハ獨逸側トシテ日本トノ「クリアリング」協定ニ關シテハ國立銀行及商品管理所ニ於テハ既ニ協定國多數ナル以上、一二例外ノ國ニ依テ事務統制ヲ複雜ルヲ可トスヘク我方ハ我國カ獨逸ノ大ナル出超國タルノ事實ヲ對抗シ事實問題トシテ我取引ノ維持促進ニ力ムルコト適當ト認メラル而シテ獨逸當局ハ前記ノ如ク日本ノ原料又ハ半製品ノ輸入ヲ考量スル意向ヲ示スニ至リ居ル處右ハ獨逸當局カ原料又ハ半製品ハ獨逸トシテ輸入ヲ必要トスルモ其支拂ハ獨逸ノ出超國ヨリ輸入スルカ又ハ之ヲ通シテ輸入スル外結局決済困難ナルヲ認メタルカ爲メナルヘクスル事情ハ我方トシテ此際獨逸ニ對スル傳統的供給國ニ代ツテ原料又ハ半製品ノ對独輸入ヲ計ルニ之ヲ利用スルコト肝要ト認メラルニ付商務官ハ其趣旨ニ於テ努力ヲ試ミツツアリ

四、尙茲ニ記述ヲ要スルハ滿洲國大豆ノ問題ナリ獨逸ハ滿洲大豆輸入ニ付直接滿洲國トノ間ニ物々交換ノ方法ヲ行ハントシ且此目的ノ爲メ大豆ノ暫定的輸入禁止ヲ行ヒタリト雖モ右試ミハ結局失敗ニ歸シ徒ラニ中間市場ヲ利シタルニ終レリ而シテ獨逸トシテハ少ナクトモ近キ將來トシテ事實満洲大豆ノ輸入ヲ避クルヲ得サル經濟的理由ヲ有スト雖モ現下ノ國際的情勢ノ下ニ外部ヨリ政治的の壓迫ヲ受クルニ對シテハ國民經濟ノ自給自足主義ヲ益々高調スヘキノミナラスル限り「クリアリング」協定ヲ強要スルカ如キハ之ヲ避ク定ナキモ事實我取引ヲ協定國ノ取引ヨリモ不利ナラシメサ方ハ獨逸カ日本トノ「クリアリング」協定ヲ好マス又右協定ナキモ事實我取引ヲ協定國ノ取引ヨリモ不利ナラシメサル限リ「クリアリング」協定ヲ強要スルカ如キハ之ヲ避ク

表シ右趣旨ヲ夫々當局ニ徹底セシムルニ力ムヘキ旨答ヘタル處十月二十四日外務省係官ハ往訪ノ商務官ニ對シ獨逸ハ日本トノ經濟關係ニ特ニ大ナル關心ヲ有シ居ルノミナラス政府當局及經濟界關係筋ハ經濟上困窮セル現在ノ獨逸ニ對シ日本側カ他國ト異ナリ公正ナル態度ニ出テラレ居ルコトヲ充分理解シ居レリ從テ獨逸トシテ日本ヲ「クリアリング」協定國ヨリモ不利ナル地位ニ置カサル考ヘナルノミナラス個々ノ場合ニ付事實日本ノ取引ニ特ニ好意的取扱ヲ爲スニシタルモノナルハ勿論更ニ進ンテ原料又ハ半製品ノ輸入ニ關シ日本ニ便宜ヲ與ヘントスル考ヘナルコトヲ内話シ尙同様官ハ現ニ「ブロック」セラレ居ル日本側受取勘定(七十萬麻克ノ見込)モ爲替資金缺乏ノ爲メ甚タ困難ハアルモ本年内ニ整理スルコトニ略々定マリ居ルコト及人絹ノ輸入ニ付テモ將來日本ニ或ル割當ヲ認メンカ爲メ目下關係筋ニ於テ折角研究中ナルコトヲ漏シタリ

ニ困難ヲ感シ満洲大豆ノ輸入ニ付テモ独逸製品ノ輸出ニ依ル決済方法ヲ求ムルニ力ヲ注クヘク而シテ独逸トシテ満洲大豆輸入ノ大部分ニ付媒介者トシテ直接関係ヲ有スル英國及丁抹トノ間ニ決済方法立テラレ得ル場合ハ兎モ角然ラサル限り独逸カ満洲國ニ對シ独逸製品ノ輸入ヲ要請スヘキハ當然之ヲ豫期セサルヲ得サル所ナリ而シテ現ニ當國各方面ニ満洲大豆輸入ノ決済方法トシテ満洲國ノ独逸製品輸入ヲ要求スル主張屢々アルニ對シ商務官ハ夫々ノ方面トノ接觸ニ於テ右決済ハ實際問題トシテ個々ノ場合ニ付取引關係者間ニ解決方法ヲ行フコト最モ實際的ナルコトヲ強調シ居ル次第ナルカ最近外務省一係官ハ本官ニ對シ独逸ハ日本ノ満洲國ニ對スル經濟關係ニ鑑ミ満洲國ニ對シ独逸製品輸出ノ困難ナルヲ知ルモ例ヘハ鐵道材料ノ如キハ満洲國ノ需要ヲ全部日本ニ於テ充スコト不可能ナルヘク從テ獨逸トシテ其或部分ヲ供給セントスルハ當然ノ要求ト思考ス從テ独逸ハ満洲國ノ鐵道計画殊ニ北滿鐵道買收成立ヲ歡迎スルモノナル旨述ヘ居リ大豆ノ對獨輸入ト關連シ独逸ノ對満輸出ノ要求ハ我方トシテ之カ對應策ヲ篤ト考究スルノ要アリト思考ス

間ニ解決方法ヲ行フコト最モ實際的ナルコトヲ強調シ居ル次第ナルカ最近外務省一係官ハ本官ニ對シ独逸ハ日本ノ満洲國ニ對スル經濟關係ニ鑑ミ満洲國ニ對シ独逸製品輸出ノ困難ナルヲ知ルモ例ヘハ鐵道材料ノ如キハ満洲國ノ需要ヲ全部日本ニ於テ充スコト不可能ナルヘク從テ獨逸トシテ其或部分ヲ供給セントスルハ當然ノ要求ト思考ス從テ独逸ハ満洲國ノ鐵道計画殊ニ北滿鐵道買收成立ヲ歡迎スルモノナル旨述ヘ居リ大豆ノ對獨輸入ト關連シ独逸ノ對満輸出ノ要求ハ我方トシテ之カ對應策ヲ篤ト考究スルノ要アリト思考ス

五、就テハ前記各点御考量ノ上當方トシテ心得フヘキ事項御回示仰度商務官ト協議ノ結果右申進ス

～～～～～

277 昭和9年11月6日 在英國松平大使、在米國齋藤大使、在

広田外務大臣より  
オランダ武富公使他宛

石油業法の実施と外國石油会社との關係など  
に關於在本邦關係各國大公使申出とこれに

対する我が方説明振りについて

通一機密合第一五六六號

昭和九年十一月六日

外務大臣 廣田 弘毅

在英國特命全權大使 松平 恒雄殿

在米國特命全權大使 齋藤 博殿

在蘭國特命全權公使 武富 敏彦殿

在滿洲國特命全權大使 萊刈 隆殿

石油業法ニ關スル件

本件ニ關シ (英米蘭三館ニ對シテハ) 本年五月二十六日  
附通一機密合第七四〇號ヲ以テ申進置タル處  
(菱刈大使ニ對シテハ) 本年三月二十八日  
石油業法ノ公布セラレタルコト並ニ

同法施行令及同法施行規則六月二十七日附官報ヲ以テ公布七月一日ヨリ實施セラレタルコトハ既ニ官報ニ依リ御承知ノコトト思考ス。其ノ後ノ經過御参考ノ爲左記ノ通申進ス、右石油業法施行規則第二十九條ニ依リ現ニ石油精製業又ハ石油輸入業ヲ管ム者ハ本年後半期ノ事業計畫ヲ定メ商工大臣ニ之ヲ届出ヅベク商工大臣ハ必要アリト認ムルトキハ右事業計畫ノ変更ヲ命ズルコトヲ得ルコトトナリ居ル處別紙附屬第一號表第四欄ニ記載ノ通り輸入業者及精製業者ハ何レモ過去ニ於ケル取扱數量ヲ超過スル數量ヲ販賣豫定數量トシテ事業計畫ヲ作成申請シ來リタルヲ以テ商工省ニ於テハ過去ノ實績、本年後半期ニ於ケル需要見込數量、本邦輸入精製業者ノ實績等ヲ參酌シタル上同表第三欄ニ記載ノ通り各社ニ販賣數量ヲ割當ツルコトニ決定シ關係各會社ニ對シ事業計畫ノ變更ヲ命ズル所アリタリ

(註) 從來六社協定ト称セラレタルモノニシテ「ライジング

サン」「スタンダード」三井、日石、小倉、三菱ノ六

社間協定ナリ 三井ハ直接石油ノ輸入又ハ精製ヲ爲シ

居ラザルモ「スタンダード」社輸入揮發油ノ販賣ニ參

與シ居ル關係上右六社協定ニ參加シ居ルモノナリ最近

松方ガ露油ヲ輸入シ一時本邦石油市場混亂ノ狀態ヲ呈

シタルガ六社協定側ト松方側トノ間ニ協定ナリ六・七・

八ノ三箇月ニ對スル販賣數量協定セラレタリ故ニ右三

箇月間ノ協定ハ七社協定トモ云フベキモノナリ  
今右割當數量ヲ見ルニ申請ノ事業計畫數量ヨリ削減セラ  
レ居ルモ過去一年間ヲ標準トスル數量(第一欄括弧内)ニ受

クルコトトナリ居レリ(附屬第一號表第五欄參照)右取

比較スルモ將又過去六月間販賣實績ニ比較スルモ大ナリ、本邦石油精製業者ニ對スル割當額ハ比較的大トナリ居ルモ本邦製油業ノ發達ヲ助長セントスル石油業法ノ趣旨竝ニ本邦石油精製會社ガ從來外國產石油ノ壓迫ヲ受ケ操短シ居リタル事情ニ鑑ミ需要增加見込數量ヲ此等會社ニ配分シタル結果ナルヲ以テ外國會社ガ前記程度ノ制限ヲ蒙ルモ止ムヲ得ザルモノナルヤニ思考セラル

然レ共外國會社側トシテハ日本製油會社ガ過去ノ實績ヨリモ有利ナル取扱ヲウケ外國會社ハ需要ノ自然增加ニ付何等ノ分前ヲモ與ヘラレ居ラザルコトヲ不當ナリトシ商工省ニ對シ增加方ヲ要求シ居ル趣ナリ

三、諸右本年後半期ニ對スル割當數量問題ハ過渡的時代ニ於ケル比較的輕微ノ問題ニ過ギザル次第ナルガ外國會社側ニ於テハ石油業法ニ依レバ將來石油輸入業ヲ繼續センガ爲ニハ保有義務履行ノ爲「タンク」ヲ設置セザルベカラズ然ルニ日本側ニ於テ將來石油精製業ヲ助長シ揮發油ノ輸入ヲ防壓セントスルモノナルニ於テハ今日「タンク」ヲ建設スルモ將來不要ニ歸シ莫大ノ損失ヲ蒙ル虞アリサレバトテ石油精製業ニ轉向セントスルモ許可ヲ受ケ得ル

#### キタルモノナリ)

四、外務省トシテハ終始關係省ニ對シ外國會社ニ對シ餘り大ナル壓迫ヲ加フルトキハ現下ノ國際情勢ヨリ見テ種々面白カラザル結果ヲ來スベク又石油業法ノ目的ヲ達成スル點ヨリ見ルモ外國石油業者ヲ餘リニ壓迫シ其協力ヲ失フコトトナリテハ石油資源ノ貧弱ナル本邦トシテハ却ツテ有害ナル事態ヲ惹起スベキコトヲ說キ考慮ヲ求ムルコトアリシガ外國會社ノ取扱振ニ對スル關係省間ノ意見ノ一致ヲ見ルコトトナリタルニ付十月三十一日附ヲ以テ在本邦英米兩國大使館及和蘭國公使館ニ對シ夫々別紙寫第六號ノ通リノ覺ヲ送附セリ(添付ノ覺書ハ英國大使館宛ノモノナルガ米國大使館宛ノモノニハ前文中ノ「英國大使閣下ヨリ受領セル本年七月二十六日附及十月五日附覺書ニ關シ」ニ代ヘ「本年九月二十五日米國代理大使ガ外務大臣ヲ來訪開陳セラレタル石油業ノ問題ニ關シ」ト爲シ又蘭國公使館宛ノモノニハ「和蘭國公使閣下ヨリ受領セル本年九月十八日附覺書ニ關シ」ト爲シ尚又前文後半ノ「英國ノ石油關係會社」ヲ夫々「米國」又ハ「和蘭國」ノ石油關係會社ト爲シタル外ハ全然同文ナリ)

ヤ否ヤ明カナラズ又日本ニ於ケル石油ノ需要ハ今後モ漸増スルモノト思考セラル處果シテ外國會社ガ右自然增加部分ノ割當ニ均霑シ得ルヤ否ヤ不明ニシテ外國會社ハ本法ニ依リ極メテ不利益且不安定ナル地位ニ置カレ而カモ大ナル負担ヲ強ヒラルコトトナリタリトシ商工省ニ至ラザリシ事情モアリ商工當局ヨリ外國會社ヲ満足セシムルニ足ル答辯ヲ與ヘザリシ處外國關係當業者ハ夫々其ノ本邦政府ニ訴フル所アリシモノ、如ク其ノ結果ナルカ在本邦英國大使ハ七月二十六日及十月五日外務次官ヲ來訪別紙寫第二號及第三號ノ「エード・メモアール」ヲ提出シ在本邦和蘭國公使ハ九月十八日外務次官ヲ來訪別紙第四號ノ「エード・メモアール」ヲ提出シ又在本邦米國代理大使ハ九月二十五日外務大臣ヲ來訪別紙第五號ノ趣旨ヲ述べ帝國政府ニ於テ外國會社ノ困難ヲ除去スル爲考慮センコトヲ要望セリ(但シ右第五號ハ米國代理大使ニ於テ正式ノ文書トシテ提出スル意向ナク單ニ自分用ノ參考トシテ持參シタルモノヲ外務大臣ノ希望ニ依リ殘シ置

右ニ依リ外國會社ハ將來ノ地位ヲ保障セラレ具体的の計畫ヲ樹立スルコトヲ得ベキコトトナリタル次第ナルヲ以テ商工省ヨリ近ク來年度ニ對スル事業計畫ヲ提出スル様關係會社ニ督促スル豫定ナリト云フ(石油業法施行規則第四條ニ依レバ來年度事業計畫ハ本年九月三十日迄ニ提出スルコトヲ要スル次第ナルガ外國會社ハ帝國政府ノ外國會社ニ對スル取扱振不明ノ爲事業計畫作成ハ不可能ナリトシ商工省ニ對シ猶豫方ヲ願出デ未ダ之ヲ提出シ居ラズ)尙委細ハ左記關係文書ニ依リ御了知相成度シ

本信送附先 在英、米、滿各大使及在蘭國公使

附屬書第一號 挥發油販賣實績及豫定數量

第二號 英國側七月二十六日附覺書

第三號 英國側十月五日附覺書

第四號 和蘭側九月十八日附覺書

第五號 米國代理大使ヨリ受領ノ控

第六號 十月三十一日附英國大使館宛覺

AIDE MEMOIRE.

The British oil interests operating in Japan have represented to His Majesty's Government that they are placed in a difficult position by the Development of the legislation for the control of the petroleum industry in Japan.

They state that the objects of this legislation are

1. The encouragement of the refining industry in Japan

2. The holding of stocks of oil in Japan.

Oil companies are called upon to submit their sale and import plans for the period July to December by July 31st next and on the basis of these plans they have to accumulate and carry stocks by March 31st next.

They have therefore an extremely short period — until July 31st — in which to make an important decision on policy and investment of capital. They must reach a decision as to whether they will undertake large expenditure on tanks for storage of oil, and also

great capital outlay.

The foregoing is the substance of the views taken by the British oil interests concerned. His Majesty's Embassy feel that these apprehensions are not without serious foundation in view of the wide powers of intervention conferred upon the authorities by the Petroleum Industry Law of 1934.

They take leave therefore to suggest that in the interests not only of the British firms but also of the petroleum industry as a whole the Japanese Government should agree to a discussion with the British oil importers of the position arising out of the new Law, since, failing a clear interpretation of the meaning of certain articles and explicit assurances on certain points, it is hardly possible for the British interests concerned to reach a decision involving very great expenditure which might in the future be rendered fruitless.

26th July, 1934.

(支那事務官印)

British Embassy,

Tokyo.

5th October, 1934.

Aide-Mémoire.

His Majesty's Ambassador has the honour to refer to his conversation with the Vice-Minister for Foreign Affairs on July 26th concerning the anxiety felt by the British petroleum interests operating in Japan as to their future position under the Petroleum Industry Law.

whether they should build a refinery. They represent that in both cases they are without information sufficient to reach a decision. Pending the formation of an Advisory Committee under the new Petroleum Law they cannot tell whether they will receive a license to refine oil in Japan. Similarly, they are faced with the difficulty of deciding whether the investment of a large sum in any form is justified since the Law institutes a system of annual licenses both for importing and refining and therefore gives them no security as to the volume of trade that may be expected in future.

The British oil interests represent that they are anxious to continue their long record of cooperation in the petroleum business in Japan. They feel willing and able to cooperate in the carrying out of the present policy; but they are now called upon under the Law to make investments which may amount to several millions of yen at short notice but without any degree of certainty as to the future on which they can justify a

decision as to their future business policy. Consequently they have found themselves in the embarrassing position

of being unable fully to comply with provisions of the Law which require them to furnish by a fixed date details of their plans for the year 1935.

In these circumstances His Majesty's Ambassador begs leave to enquire whether the Japanese Government have been able to give consideration to the position of the British petroleum interests as it is affected by the Petroleum Industry Law and to express on behalf of His Majesty's Government the hope that it will be found possible to direct or modify the operation of that Law in such a way as to relieve them of hardships which it threatens to impose.

(支那輸出団体)

GEZANTSCHAP  
DER  
NEDERLANDEN.

NO.

AIDE MEMOIRE.

ing and refining, in consequence of which no security is given as to the volume of trade that may be expected in the future.

3. The encouragement by the law of the refining industry in Japan, a policy which is detrimental to the refining industries which are carried on at the points of production of crude oil and with which Netherlands interests are specially concerned. The Netherlands oil interests state that notwithstanding the disadvantages following the uneconomical effects of refining in the consuming country instead of at the point of crude oil production, they are willing to consider the erection of a refining plant in Japan but so far they have not been able to ascertain if a license to refine oil in Japan will be granted to them and if so whether they will enjoy the same treatment as the Japanese companies.

4. The regulation that prices will be fixed by the Government which can compel the oil companies to sell their stocks and to continue to import and sell accord-

The Bataafsche Petroleum Company which is operating in Japan through the Rising Sun Company has pointed out to the Netherlands Government the very difficult position in which the Netherlands oil interests in Japan are placed by the new regulations of the Petroleum Industry law of March 27, 1934 and the Imperial ordinances therewith connected.

As has been represented on several occasions by the "Rising Sun" Company to the Minister of Communications they consider several of the above mentioned regulations to be of a very detrimental nature to their business and hard to comply with. The most outstanding of these are the following;

1. The requirement of holding a six months' stock of various petroleum products in the interest of the Japanese Government, which involves a considerable outlay of capital, whilst no security beyond one year is given for the required investments.
2. The system of annual licences both for import-

ing to their import program, (which they have to submit at fixed periods) at a price fixed by the Government.

The Netherlands oil interests represent that they are anxious to continue their long record of cooperation in the petroleum business in Japan but in view of the investments which they are now called upon to make under the Petroleum Industries Law they feel it impossible to come to a decision before knowing fully the conditions under which they will be allowed to carry on their future trade.

They highly appreciate the explanations which the Minister of Communications has so far tendered them but unfortunately these do not yet give them the necessary enlightenment about the future conditions of their trade.

The Netherlands Government, which is closely following the developments of the oil trade in Japan, fully understands the difficult position in which the Netherlands oil interests are placed and the apprehension they

feel for their future trade in view of the extensive powers conferred on the Government by the Petroleum Industry Law of 1934. In consideration of the very important Netherlands interests which are at stake, the Netherlands Legation, acting under instructions of its Government, takes leave to approach the Japanese Government with the request to consider means to remedy the detrimental causes which render it extremely difficult for the Netherlands oil interests to reach a decision which is bound to involve great expenditure for which at present no sufficient security is given.

September 18th. 1934.

(立驅軸銀日本)

1. The American Government has noted the enactment by the Japanese Government of a law(Law. No.26 of March 27, 1934) for the control of the petroleum industry in Japan and, in view of the substantial participation of American interests in that industry, it

funds necessary for the operation of those enterprises. Accordingly it is felt that subjection of their enterprises to such conditions and the meeting by the companies of such requirements would be tantamount to a laying upon the companies of special burdens the effect of which would be a contribution to a national objective of Japan at heavy cost to the American enterprises concerned but with no advantage or compensation to the enterprises themselves.

3. In view of the destructive effect which application of certain provisions of the law would presumably have upon legitimate and established interests developed over a period of many years by American enterprises in response to economic needs of the Japanese people, the American Government express the hope that the Japanese Government will see its way clear to avoid subjecting American petroleum interests in Japan to the unusual hazards and the burdensome restrictions upon the normal conduct of business which are appar-

is moved in all friendliness to invite the attention of the Japanese Government to the disabilities which the law under reference threatens to impose upon American petroleum interests in Japan.

2. The American firms concerned are convinced that if as a condition to continuation of their business in Japan they are to be required to install equipment and maintain stocks of oil and oil products in excess of their ordinary commercial requirements; if the required stocks are to be subject to purchase by the Japanese Government at a price to be fixed by that Government; if there is likelihood or possibility that quotas will be prescribed regardless of the amount of business done in the past by firms that may be affected; and if there is likelihood or possibility that quotas may subsequently be raised or be lowered at will; - these firms would not be able to formulate long term plans for the reasonable safeguarding of their enterprises in Japan and would find it impossible to invest with any sense of security

ently implicit in the law under reference.

(立驅軸銀日本)

續

特國政府は英國大使館にて承認を以て本年七月二十日蓋及十四日正午於上記書面に關し慎重ナル考慮ヲ拂ヒタルガ、日本業法へ擬似及帝國政府ノ回法運用ノ方針ハ左記ノ通りナリ依リ石油業者ノ營業ハ安全ヲ尊ハシベルヤハニ非キル也、右ノ英國ノ石油關係會社ニ傳達セラニ帝國石油業者ハ規定ノ後日本ノ石油事業ニ協力スル様勧奨ヤハシハニシテハ。

「日本油業及日本輸入業ノ事業計畫」付毎年政府ノ認可ハ該ケシマルコムレシタルハ石油ノ輸入、生産、販賣等ノ調整シ供セラ事業ノ圓滑ナル遂行ヲ指導監督ヤハシベシ擬似ノ基クヘリシト、石油業者ノ利益ヲ無視シ或ハ事業ノ繼續性ヲ阻礙セハスベルガ如キヤハニ非ズ。從テ日本ノ於ケル石油ノ需要が逐年増加ノ現勢ヲ持續スル限り石油業法ノ施行ニ於ケル業務ノ範圍以トロ抑制ヲ加フルコトナム。

三、將來ニ於ケル石油ノ増加需要量ノ各業者ニ對スル配分ハ  
毎年其ノ事業計畫ノ認可ニ當リ國內ノ石油需給ノ趨勢、  
精製業ノ狀況、石油輸入狀況其ノ他諸般ノ事情ヲ參酌シ  
テ決定セラルベキモノニシテ、豫メ之ヲ確定シウベキモ  
ノニ非ズト雖モ、日本國ハ一般ニ製品ノ輸入ヨリモ輸入  
原料ニヨル精製ヲ希望スルノ立場ニ在ルヲ以テ休止精製  
設備ノ現存シ居ル事情ニモ鑑ミ先ツ其ノ合理的操業計畫  
ニ對シテ適宜增加需要量ヲ割當ツルコトトシ、爾餘ノ增  
加部分ニ付テハ之ヲ各精製業者及輸入業者ニ對シ可及的  
公平ニ配分スル者ナリ。

三、石油精製業ノ許否ハ具体的場合ニ於テ國內ノ石油需給ノ  
趨勢、精製業者ノ狀況、其ノ他諸般ノ事情ヲ考慮シ石油  
業委員會ノ議ヲ經テ決定セラルベキモノナルニ付、具体  
的ノ計畫ニ接シ右委員會ノ議ニ附シタル後ニ非ザレバ其  
ノ許否ヲ言明シ難キ次第ナルモ、揮發油ノ輸入事業ヲ營  
ム會社ガ前二項ノ趣旨ニ依リ割當ヲ受ケタル輸入數量ノ  
範圍内ニ於テ製品ノ輸入ニ代フルニ原料油ヲ輸入シ國內  
ニ於テ精製業ヲ營マントスルカ如キ場合ニ於テハ、特別  
ノ事情ナキ限り之カ許可ヲ受クルコト比較的容易ナルヘ

278 昭和9年11月8日 広田外務大臣より  
在米國齋藤大使宛(電報)

### 石油業法による内外各石油会社の六ヶ月分貯 油義務の平衡性について

本省 11月8日発

第二九四號

貴電第四八一號後段ニ關シ

日本ノ六箇月貯油義務ハ内外人ニ拘ハラス石油ヲ輸入スル

モノニ等シク課スルモノナルニ付衡平ノ觀念ニ反スルコト  
ナキノミナラス關係省ノ意見ニ依レハ保有義務履行ニ依ル

負擔ハ結局石油價格ノ引上ニ依リ消費者ニ轉嫁セラルヘキ

見込ナル由ナリ本件ハ恐ラク當初日本石油會社ニノミ補助

金ヲ支給セントノ議アリタルタメ之ニ關聯シ機會均等等ヲ

云々スルモノヲ生シタルヤニ想像セラル處補助金支給ハ

豫算ノ關係上取止メトナル見込ナリ

尙我國ハ日米條約ニ依リ個人ニ付テハ內國民待遇ヲ保證シ

居ルモ(一條、六條參照)會社ニ付テハ右義務ナク(七條二  
項)又機會均等ノ義務ナキコトモ御承知ノ通ナリ勿論當方

トシテハ法律論ハ避ケ度考ニテ此ノ點ハ前記補助金ノ件ト  
ムルカ如キ場合ニ於テハ事業ノ圓滑ナル遂行ヲ期スル上  
ニ於テ好都合ナルヘク其ノ許可モ一層之ヲ容易ト爲スノ  
結果ヲ來スヘシ。

四、石油業法第六條ノ規定ニ依リ政府ハ石油業者ノ所有スル  
石油ヲ購入スルコトヲ得レドモ右ハ公益上緊急ノ必要アリ  
ル場合ニ限り而モ時價ヲ標準トスルモノナルコトハ同條  
及同法施行令第八條ノ規定スル通ニシテ石油業者ニ對シ  
不當ノ壓迫ヲ加フルカ如キコトナシ。次ニ石油業者ハ政  
府ノ認可ヲ受ケタル事業計畫ノ範圍内ニ於テ自由ニ石油  
ヲ販賣シ得ルコトヲ原則トスルモノニシテ石油ノ販賣價  
格ニ付テハ政府ハ濫ニ之ヲ干渉スルコトナシ。唯政府ハ  
公益擁護又ハ業界全般ノ利益ヲ維持スル爲特ニ必要アリ  
ト認メタルトキニ限り石油業法第七條ノ規定ニ依リ販賣  
價格ノ變更ヲ命ズルコトヲ得ルモノニシテ業界ノ安定ヲ  
害シ又ハ業者ノ利益ヲ阻碍セントスルモノニ非ズ。

昭和九年十月三十一日

併セテ貴官限リノ御含迄申添フル次第ナリ

279 昭和9年11月15日 広田外務大臣より  
在仏國三谷臨時代理大使宛

シリアなど仏國委任統治地域における我が方  
連盟脱退後の通商均等待遇確保方策につき仏

國當局者の意向探査方訓令

通一機密第一七八號

昭和九年十一月十五日

外務大臣 廣田 弘毅

在佛

臨時代理大使 三谷 隆信殿

委任統治地域ニ於ケル通商均等待遇問題ニ關スル件

一、「シリヤ」ニ於テハ複稅制度ヲ採用シ居リ非聯盟國ニ對

シテハ高率關稅ヲ課スルコトナリ居ル關係上來年三月

帝國ノ聯盟脱退ノ效力發生ト共ニ直ニ右高率關稅ヲ課ス

ルニ至ルベク現ニ本月上旬在「アレキサンドリヤ」總領

事ヨリノ來電ニ依レバ「シリヤ」商人中ニハ三月積以後  
ノ邦品註文ヲ差控フル向多キ趣ナリ又其ノ他ノ佛國受任

地域ニ於テモ漸次差別待遇ヲ加フルニ至ル虞アルニ付本邦商品市場ノ保持上可成差別待遇ヲ受クルガ如キ事態ヲ發生セシメザル様早キニ及ンデ佛國側ノ諒解ヲ取付ケ置度キ次第ナルガ他方本邦ヨリ委任統治地域ニ於ケル通商均等待遇ヲ要求スルコトガ動機トナリテ本邦ノ南洋委任統治地域保有問題ガ國際聯盟等ニ於テ論議セラレ紛糾ヲ見ルニ至ルノ虞ナシトセズ海軍軍縮問題ヲモ控ヘ居ル此際本問題ノ措置振ニ關シテハ極メテ慎重ナル注意ヲ要スル次第ナルヲ以テ本件ニ關シ正式ノ交渉ヲ爲スコトハ今暫ク之ヲ見合セ先づ前記ノ如キ事態ヲ惹起スルガ如キ虞ナキ方法ニ依リ佛國側ノ意図ヲ「サウンド」シ大体何等問題ノ紛糾ヲ見ルコトナクシテ圓滿ナル解決ヲ付ケ得ル見込ノ立チタル場合始メテ「シリヤ」ヲ曰佛條約ノ適用區域内ニ加ヘ又ハ特別ノ協定ヲ遂クル等正式ノ交渉ニ移ルコトト致度キ考ナリ

二、就テハ上述ノ機微ナル關係ニ充分御留意相成リ何等適當ノ機會ヲ捉ヘ口頭ヲ以テ貴任國當局ニ對シ帝國ハ主タル同盟及聯合國ノ一トシテ舊敵國ノ拋棄シタル領土ノ處分ニツキ重要ナル地位ヲ有セルニ鑑ミ帝國ノ聯盟脫退後ト

外相および外務省係官との会談について  
機密第一三九号  
(昭和10年1月8日接受)

昭和九年十二月十一日  
在白

特命全權大使 有田 八郎〔印〕

外務大臣 廣田 弘毅殿

「コンゴー」盆地條約改訂問題ニ關スル件  
本件ニ關シテハ曩二月下旬往電ヲ以テ申進メタル次第有之処今般白國內閣更迭ノ機会ヲ以テ本月七日新內閣外相約來年七月改訂ノコトト相成リ居ルコトサヘ失念シ居リ本使ヨリノ説明ニ依リ記憶ヲ回復シタルカ如キ始末ニテ何等要領ヲ得ルニ至ラサリシモ会談中同外相ハ元來本問題ハ相當複雜ナル關係ヲ有シ居ルヲ以テ豫メ関係各國間ニ意見ノ交換ヲ行フコト無クシテ漫然会議ヲ開催スルモノ一致ヲ見ルコト容易ナラサルヘシ又「コンゴー」總督ノ條約廢棄論ハ之ヲ承知セスト述ヘタルハ自國外務省殊ニ外相ノ本件ニ対スル氣分ノ一端ヲ伺ヒ得ルモノト認メラリ

雖モ佛國委任統治地域ニ於テハ本邦ノ通商貿易ニ對シ主要タル同盟及聯合國ニ非ザル平聯盟國ニ對スルヨリモ不利ナル待遇ヲ與フルガ如キコトナキヲ確信シ居ル處「シリヤ」ニ付テハ同地方ノ關稅法ノ關係モアルニ付豫メ佛國政府ニ於テ本邦ニ對スル均等待遇許與ニ必要ナル措置ヲ講ゼラレンコトヲ切望シ居ル次第ナルガ右ニ關シ佛國政府ハ如何ナル考ヲ有スルモノナリヤトノ趣旨ヲ以テ帝國ノ地位ニ關シテハ昭和九年十一月十五日附往信通一機密合第一六三八號參考資料御參照相成度

尚本件ニ關シテハ昭和九年十一月十五日附往信通一機密合第一六三八號參考資料御參照相成度

本信寫送付先 在英、米、白各大使  
在壽府國際會議帝國事務局長代理  
在「アレキサンドリヤ」總領事代理

280 昭和9年12月11日 在ベルギー有田(八郎)大使より  
廣田外務大臣宛

コンゴ盆地條約改訂問題に関するイーマンス

外相トノ会談ハ上述ノ如ク要領ヲ得サリシモ本件ノ如キハ或ハ事務當局者ニ就キ問訊サシムルコト然ルヘキヤト存セラレタルニ依リ本月十一日館員ヲシテ白國外務省係官(白國植民省ハ兼テヨリ本件ハ同外務省所管事務ナリト申居レリ)ヲ往訪セシメタル処同係官(「コンゴー」植民地立法機関タルConseil Colonialノ一委員ナリ)ハ盆地條約ハ元來一九三〇年会議ヲ開催シテ之カ改訂ヲ議スヘキ筈ナリシモ英國ノ希望ニ基キ延期トナリタルモノナレハ次回會議ノ開催ニ付テモ英國ハ「イニシアチヴ」ヲ採ルモノナルヘシト期待セラルル次第ニテ白國側ヨリ「イニシアチヴ」ヲ採ルヘキモノト思考シ居ラス「コンゴー」總督ノ演説ハ植民省關係官吏カ其ノ希望ヲ表明セルニ過キサルモノト了解シ得ラルヘク白國政府ノ方針ハ未タ決定シ居ラス又英國ノ態度ニ付テハ何等承知セスト答ヘタル趣ナリ

尚右会談中右係官ハ日本ノ聯盟脫退ニ伴ヒ本條約ニ對スル「ステータス」ニ變化ヲ來サ、ルヤト尋ネタル由ニテ右ニ對シ館員ヨリ本條約ニハ米國モ參加シ居ル程ニテ聯盟國タリヤ否ヤノ点ハ毫モ問題ニアラスト思考スル旨答ヘ置キタル由ナリ

本信寫送付先 在英米佛伊各大使、在「ポルトガル」代理公使、在「アレキサンドリア」總領事、在「モンバサ」領事代理  
……

281 昭和9年12月26日 広田外務大臣より  
在獨國杉下臨時代理大使宛(電報)

**輸入制限問題に關し獨國側へ抗議方訓令**

付 記 十月十三日付、作成局課不明

〔日獨間貿易調制ニ關スル私見〕

本省 12月26日後7時發

第一二五號 貴信機密第三四三號及長井商務官來電第六一號六六號及七

二號ニ關シ

一、獨逸現下ノ難局ハ同情ニ耐エス又全國カ我邦ニ對シ事實

上多少共好意ヲ示シシ、アルハ之ヲ認ムルモ獨逸今回ノ

割當カ品目ニ付著シキ制限ヲナシ且稍好轉セル本年上半

期ノ實績ヲ基準トセス昨年ノ比率ニ依リタルコトハ好意的取扱ノ名ニ隱レ當業者ノ活動ヲ拘束シ且我方貿易ヲ現

在ノ四對一ヨリ五對一ニ逆轉セシムモノニシテ甚タ不合理ナルノミナラス最近當業者ヨリモ強硬ナル陳情アリ此儘獨逸側措置ヲ默認スルコトハ將來ノ爲ニモ面白カラサルニ付テハ此機會ニ於テ獨逸側ノ注意ヲ喚起スルト共ニ事實上ノ取極トシテ大筋ニ付テナリトモヨリ有利ナル取扱ヲ保証セシメ置クヲ肝要ト思考ス依テ貴官若クハ長井商務官ハ成ルヘク早キ機會ニ於テ我方ハ年々獨逸ヨリ非常ナル入超ニテ本年度ハ九千万圓ニモ上ルヘキ處今日ノ不況時ニ際シ我方カ獨逸品ノ輸入竝ニ代金支拂ニ對シ何等ノ制限ヲ設ケス先方ノ爲替資金獲得ニ尠<sup>(アラカ)</sup>ス寄與シツツアルニ對シテハ獨逸トシテ何等カノ「ヂエスチユア」ヲ爲シ然ルヘキコト並ニ我方ハ最近出超國ヨリ頻リニ物資買付増加ヲ要求セラレ居ルニ付之力對應策トシテ結局獨逸ノ如キ入超國ニ對シ直接若クハ間接ニ「コンベンセイション」ヲ求ムルノ外ナキ狀態ニ在ルコトヲ指摘セラレ品目ノ制限ヲ廢止乃至緩和スルト共ニ割當比率ニ付何モ一對一ト迄ハ云ハサルニ付少ク共本年ノ統計ヲ基礎トシ現在ノ四對一ノ割合ヲ呼寄スル様强硬ニ御交渉相成リ結果回電アリタシ

追而右ノ外我方トシテハ物々交換ヲ主張シ得サルニ非サ

ルモ右ハ賣ト買トノ出會ヲツクルコト困難ナル由ニテ當業者側ニテ餘リ希望シ居ラサルニ付尙貴地ノ實際ニ付御

研究相成ルコトシ差當リテハ前記ノ主張ニテ押進ムコトト致度シ

三、滿洲大豆ハ本年ハ不作ノ爲強テ獨逸ヘノ輸出ニ依頼スルコト少ナキ趣ナルカ滿洲國當局側ニ於テハ獨逸側ヲシテ大豆ニ對スル制限ヲ一掃セシムル迄ハ姑息ノ妥協ニ應セストノ意嚮アルノミナラス他面日獨貿易ニ關連シ我方ヨリ全問題ヲ取上クルハ不利ナルヤニ思考セラル、ニ付テハ右ハ全然滿洲國ノ問題トシテ干與セサルノ立前ヲトルコト、致度シ

長井商務官ニ轉報アリタシ

編 注 十二月二十日發在獨國長井大使館商務書記官より広田外務大臣宛電報第七二号において同商務書記官は十一月一日より翌年一月三十一日迄の三ヶ月間に、独國側より輸入許可証が発給される本邦品リストならびにその額につき我が方へ正式通知があつた旨報

(付 記)  
日獨間貿易調制ニ關スル私見 九、一〇、一三  
日獨貿易ノ調節ニ關シテハ獨逸ハ現ニ經濟的非常時ニ直面シ其輸入ヲ增加スルコト困難ナル立場ニアリ且我國ニ於テモ獨逸ヨリ輸入シツツアル鐵製品機械、染料硫安等ハ大体獨逸ノ特殊工業品ニシテ我國ニ於ケル製造困難ナルカ若クハ輸入ニ待ツ方經濟的ナル商品ナルヲ以テ我國ニ於テ之カ輸入ヲ阻止制限スルコトハ困難且非經濟的ニシテ獨逸ニ對シ極端ナル措置ニ出ツル能ハサルノ憾アルト共ニ假令相當思切ツタル態度ヲ以テ獨逸ヲ壓迫スルモ獨逸ハ滿洲ニ對シ報復ヲ爲スノ惧モアリテ日獨貿易ノ調節ニハ相當困難ナル事情伴フ處去リトテ此儘ニ事態ヲ放任シ獨逸ノ爲スニ委スルニ於テハ獨逸ハ我無爲ニ乘シ今后如何ナル措置ニ出テントモ限ラス現二人絹、電球等ノ對獨輸出ハ殆ント絶無トナリ又爲替割當許可限度ハ極度ニ縮限セラレ右ハマルクノ行先不安ト共ニ我對獨輸出ニ對スル一大障礙ナル處我國ハ獨逸品ノ輸入ニ對シ何等ノ制限措置ニ出テ居ラス之カ

爲最近我對獨輸出入額ハ絕對的ニハ増加ノ傾向ニアルモ  
(輸出モ圓安ノ爲増加シ居レリ)貿易差額ハ左表ノ如ク漸次  
我方ニ不利トナリソツアリ

(大藏省統計ニ依ル、單位圓)

一九三一年我方入超 六四、八二六、五一〇

一九三二一〃 六一、三九一、三三三

一九三三一〃 八三、三九〇、二三三五

一九三四一(一月一八月) 六二、〇九七、四七七

即チ本年度ハ八月末迄ノ入超額六千二百万圓ノ入超ヲ見ル計算  
比率ヲ以テ進メハ本年末迄ニハ九千万圓ノ入超ヲ見ル計算  
トナル依テ我方トシテハ此際獨逸政府ノ措置ニ付先方ノ注  
意ヲ喚起シ我方ヨリノ輸出增加ヲ妨礙セサル様何等獨逸政  
府ニ對シ申入ヲ爲スコト然ルヘシト思考ス然レトモ前述ノ  
如ク獨逸ハ金準備擁護ノ爲必死ノ努力ヲ續ケ必要缺クヘカ  
ラサル工業原料品ノ輸入受理ヲ强行シツツアル現狀ナレ  
ハ積局<sup>(ききゆう)</sup>のニ我商品ノ輸入増加ヲ應諾ゼンムルニハ我方トシ  
テモ通商擁護法ニ依ル關稅引上其他必要ノ措置若クハ日獨  
取引ノ強制的清算等ヲ以テ先方ヲ威嚇スルコト必要ナリ而  
シテ右ニ依リ我商品ノ自然的對獨輸出增加ノ趨勢ヲ阻止セ

シメサルノ效果ヲ擧クルコトヲ得ルモ尙十分ノ成功ナリト  
云ヒ得ヘシト信ス  
ハ  
一、中南米、阿弗利加等ノ新市場諸國ヨシテ對日貿易調節ニ  
利用セシメサルカ爲日獨間交渉ハ可成之ヲ極祕トシ獨逸  
ヲシテ之ヲ宣傳セシメサルコト  
最近我國ニ對シテハ南阿、ケニヤ殖民地、アルゼンチン、  
ハイチ等ノ新市場諸國ヨリ之等諸國產品ノ買付增加方要  
求續出スル狀態ナルカ我方カ表向日獨貿易調節ノ幟旗ヲ  
明ニシテ獨逸ニ何等申入ヲ爲シタルコト公表セラルニ  
於テハ之等諸國ニ對スル懸引上面白カラサルノミナラス  
其他ノ我輸出超過國ヨリモ新ニ買付申込殺到スル懸念ア  
ルヲ以テ他國ヨリ何等問合セアラハ右ハ「獨逸ニ對スル  
抗議」位ノ所ニテ應酬スルコト適當ナルヘシ尙最初ヨリ  
法外ノ要求ヲ提出スルニ於テハ獨逸ハ故意ニ之ヲ宣傳シ  
新市場諸國ニ對スル我立場ヲ困難ナラシムルノ惧アリ要  
之交渉公表ハ兩國ニ於テ之ヲ差控フル様豫メ獨逸ノ諒解

### ヲ取付クルコト必要ナルヘシ

### 三、何等協定ヲ締結ストセハ右ハ短期間ノモノトナスヲ要ス

我國產業ハ圓安ニ乘スル輸出增進ニ刺激セラレ近時殊ニ  
其發達目覺マシク現ニ獨逸ヨリ輸入セラレツツアル各種  
機械染料藥品等モ漸次我國ニ於テ之カ經濟的製產可能ト  
ナリ從テ獨ヨリノ輸入ハ漸次減少スヘク一方獨逸カ我國  
ヨリ輸入シツツアル動植物脂肪及油類、鈕釦、製帽真田  
等ハ獨逸工業ノ原料品ナレハ之カ買付ハ今后增加コソス  
レ減少セサルヘク從テ兩國貿易額カ「パリティー」ニ達  
スルコトハ困難ナリトスルモ少ク共將來漸次接近ノ傾向  
ヲ辿リ我入超額ハ次第減少スルニ非ヤト思考セラル  
右ハ獨滿貿易ニ付テモ同様ニシテ即チ滿洲國カ現ニ獨逸  
ヨリ供給ヲ受ケツツアル製造品ニ付テハ將來我國ヨリノ  
供給可能ナルヘシ然レ共獨逸ハ其工業維持上一定量ノ滿  
洲大豆ハ必ス之ヲ必要トスヘク從テ日獨及獨滿貿易ノ將  
來ニ付獨逸ハ寧ロ弱キ立場ニアリ如斯日獨間輸出入ハ將  
來漸次其差縮少シ來ルモノト思考セラル處右誤ナシト  
セハ現在獨逸側ノ輸入制限ヲ索制スル一時的措置トシテ  
ナラハ兎モ角永ク兩國間貿易ヲ例ヘハ四對一ト云フカ如

キ比率ニ拘束セラルルコトハ我方トシテモ面白カラサル  
ヘシ

### 三、貿易調節ハ之ヲ日獨兩國間ニ限ルコト

獨逸ハ滿洲國ヨリ多量ノ大豆ヲ購入シ日滿兩國ヲ合スル  
時ハ獨逸トノ貿易ハ殆ント平均スルカ若クハ我方カ多少  
ノ出超トナル形勢ニ在ルノミナラス現下日滿經濟「ブロ  
ツク」高唱セラレ居ルニ鑑ミ獨逸ハ自己ノ地位ヲ有利ニ  
轉回スル爲滿洲國ヲモ加ヘテ問題ヲ考察シ一定量ノ大豆  
買付保證ヲ與フルニ對シ日滿兩國ニ於テモ一定量ノ獨逸  
商品買付ヲ保證スヘキ旨要求シ來ルモノト思考セラル  
處獨逸ハ油脂工業並ニ右ヲ原料トスル各種工業維持上是  
非共滿洲大豆並ニ我國ヨリノ魚油其他ノ原料ヲ必要トス  
ルモノナレハ右ニ付テハ強ヒテ將來ニ於ケル獨逸ノ買付  
確約ヲ求ムルノ必要モナキ次第ナリ、反之獨逸ヨリノ輸  
入品ハ將來漸次我方ニ於テ自給可能ナリトセハ今日之ガ  
一定量買付ヲ保證スルコトハ不利ニシテ將來ヲモ拘束セ  
ラレ面白カラス、要之滿洲國ハ全然本件交渉ヨリ除外シ  
且買付約束ノ交換ヲナサス問題ヲ全然日獨兩國間ニ限ル  
ヲ可トスヘシ

参考迄ニ日滿兩國ノ對獨貿易額ヲ表示スレハ右ノ如シ  
(滿洲國貿易額ハ國幣圓ヲ各年ノ平均爲替相場ニ依リ圓  
ニ換算セルモノナリ單位千圓)

昭和七年

昭和八年

| 輸出 日 本 | 九、三五〇  | 一二、四一  |
|--------|--------|--------|
| 輸入 日 本 | 六三、〇四四 | 六七、二八六 |
| 計      | 七二、三九四 | 七九、六九七 |
| 計      | 七六、六六二 | 一一、四〇三 |
| 差引我方入超 | 四、二六八  | 三六、七〇六 |

註、右ハ和蘭及英國ヲ通シ輸出セラル大豆ヲ除ク  
尙滿洲國除外ニ關シ參考トナルヘキハ本年七月英獨間ニ  
締結セラレタル清算協定之ナリ、即チ獨逸カ最近廣汎ナ  
ル範圍ニ亘ル對外債務ノ支拂延期ヲ宣言シタルニ對シ英  
國ハ年々獨逸ヨリ多額ノ入超ナルニ不拘對獨債權ノ元利  
ニ付獨逸カ支拂ヲ延期スルハ不都合ナリトシ獨逸ニ對シ  
支拂フヘキ貿易差額ヲ差押ヘ右ヲ以テ英國債權者ニ對ス  
ル元利拂ニ充テ(強制的爲替清算)且獨逸品ニ對スル關稅

ヲ引上クヘシト威嚇シ結局兩國間折衝ニ依リ双方共多少  
ノ讓歩ヲナシ結局商取引ヨリ生スル債政ニ付清算協定ヲ  
締結スルコトナリタルカ右折衝ノ内容ハ詳ナラサルモ  
最初獨逸ハ英本國ノミニ對シテハ巨額ノ出超ナルモ英國  
領土ヨリ多額ノ原食料品ヲ輸入スル關係上之等殖民地ヲ  
モ加フル時ハ獨逸側ノ入超ナルヲ以テ獨逸ハ殖民地ヲモ  
合シタル英帝國全体トノ清算協定ヲ提議シタル形跡アル  
處英國ハ七月二十日以前ノ取引ヨリ生セル債權ニハ觸レ  
ス(ランカジヤ商人ノ綿糸輸出代金ニシテ回収不能ノモ  
ノ相當額アリ)且獨逸モ英國ノ屬領地ハ之ヲ除外スルコ  
トニ相互ニ讓歩シ協定ノ締結ヲ見タルモノノ如シ、英國  
殖民地ニシテ然リ苟ンヤ滿洲國ハ一個ノ純然タル獨立國  
ニシテ且獨逸ハ未タ之カ承認サヘモ爲シ居ラサル關係モ  
アリ我國トシテハ獨逸側ノ滿洲國包含要求ニ對シ斷然之  
ヲ拒絶スル上ニ於テ相當強キ立場ニアリ  
以上ハ日獨貿易調節ノ交渉開始ニ際シ注意スヘキ諸點ナル  
カ然ラハ調節ヲ日獨兩國間ニ制限スルトシテ如何ナル具体  
の方策ヲ以テ之ニ望ムヘキヤヲ考察スルニ左ノ諸案ヲ考フ  
ルヲ得ヘシ

- 一、全然事態ヲ放任シ成行ニ委スルコト
- 二、兩國貿易ヲ四對一ノ比率ニ保ツコト
- 三、清算協定ヲ締結スルコト
- 四、我國ヨリノ輸入ニ付手加減ヲ加ヘシムルノ程度ヲ以テ  
満足スルコト

一、(事態放任論)我對獨輸出ハ一九三一年ノ八百四十萬圓ヨ  
リ一九三二年九百三十萬圓一九三三年一千二百四十萬圓  
ト茲ニ三年間漸増ノ傾向ヲ示シ本年モ八月迄ニ於テ既ニ  
一千三百六十萬圓ニ達ス此模様ナレバ本年末迄ニハ二千  
萬圓ニ達スヘク獨逸ニシテ現在ノ危機ヲ切抜ケ得タル曉  
ニハ更ニ增加ノ望アリ(尤モ同國ヨリノ輸入モ日本内地  
産業ノ活潑ニ伴ヒ右以上ニ增加シ差引入超額モ漸増シツ  
ツアリ)且日獨貿易ノ將來ハ我工業發達ニ依ル本邦側輸  
入品ノ自給可能ニ依リ漸次「パリチー」ニ近ツクモノト  
假定スレハ獨逸經濟力常態ニ復スル迄暫ク事態ヲ放任シ  
成行ニ委スヘシトノ論モ生シ得サルニ非ス然レ共問題ハ  
要スルニ我方カ獨逸ヨリ非常ナル入超ナルニ不拘我國輸  
出ニ對シテモ無差別的ニ極端ナル輸入爲替許可限度其他  
ノ輸入制限策ヲ適用シテ消極的ニ我輸出ヲ阻礙シ我入超

ヲ引上クヘシト威嚇シ結局兩國間折衝ニ依リ双方共多少  
ノ讓歩ヲナシ結局商取引ヨリ生スル債政ニ付清算協定ヲ  
締結スルコトナリタルカ右折衝ノ内容ハ詳ナラサルモ  
最初獨逸ハ英本國ノミニ對シテハ巨額ノ出超ナルモ英國  
領土ヨリ多額ノ原食料品ヲ輸入スル關係上之等殖民地ヲ  
モ加フル時ハ獨逸側ノ入超ナルヲ以テ獨逸ハ殖民地ヲモ  
合シタル英帝國全体トノ清算協定ヲ提議シタル形跡アル  
處英國ハ七月二十日以前ノ取引ヨリ生セル債權ニハ觸レ  
ス(ランカジヤ商人ノ綿糸輸出代金ニシテ回収不能ノモ  
ノ相當額アリ)且獨逸モ英國ノ屬領地ハ之ヲ除外スルコ  
トニ相互ニ讓歩シ協定ノ締結ヲ見タルモノノ如シ、英國  
殖民地ニシテ然リ苟ンヤ滿洲國ハ一個ノ純然タル獨立國  
ニシテ且獨逸ハ未タ之カ承認サヘモ爲シ居ラサル關係モ  
アリ我國トシテハ獨逸側ノ滿洲國包含要求ニ對シ断然之  
ヲ拒絶スル上ニ於テ相當強キ立場ニアリ  
以上ハ日獨貿易調節ノ交渉開始ニ際シ注意スヘキ諸點ナル  
カ然ラハ調節ヲ日獨兩國間ニ制限スルトシテ如何ナル具体  
の方策ヲ以テ之ニ望ムヘキヤヲ考察スルニ左ノ諸案ヲ考フ  
ルヲ得ヘシ

ニ對シテノミ特別ノ取扱ヲ爲シ得サルヘク從テ單ナル文書交換ノミ以テシテハ良ク四對一ノ比ヲ維持シ得ルヤ否ヤ疑ナキヲ得ス

試ニ貿易外收支ヲ除外シ商取引額ノミニ依リ昭和八年度ニ於ケル獨逸ノ輸出超過額ノ順位ヲ見ルニ左ノ如シ

順位 國名 獨逸ヨリノ輸出超過額(單位千マルク)

|               |         |
|---------------|---------|
| 一、和蘭          | 三八〇、七八六 |
| 二、瑞西          | 二六九、九三一 |
| 三、佛國          | 二二一、〇一四 |
| 四、英國          | 一六七、一四一 |
| 五、白耳義及ルクセンブルグ | 一三六、二七七 |
| 六、瑞典          | 八八、四七〇  |
| 七、「ソ」聯邦       | 八八、一一三  |
| 八、奧太利         | 六三、一二〇  |
| 九、伊太利(屬領ヲ含ム)  | 六〇、八四三  |
| 十、日本          | 五九、九三三  |
| 十一、丁抹         | 四〇、三二一  |
| 十二、致須國        | 三八、四〇一  |
| 十三、愛蘭         | 一四、一二一  |

以下葡國、諾威、コロンビア、伯國、フィンランド、墨國、比島、ダンチツヒ、パレスタイン、玖馬、バラグアイ、エクアドルノ順ナルモ金額省略

即チ右ニ依レハ商取引ノミニ見テ我國ハ獨逸ノ得意先トシテ第十位ニアリ從テ我國ニ許與スル特別ノ取扱ハ大勢上他ノ諸國ニモ許與セサルヘカラサル事情アリ

且又四對一ノ比率以下ニ日獨貿易ヲ悪化セシメサルコトヲ約束セシムルモ獨逸ハ右比率サヘ保テハ其義務ヲ果ス

次第ナルヲ以テ之上ノ輸入増加ニハ何等努力ヲ拂ハサルニ至ルノ惧アリ依テ右ニ一步ヲ進メ、我方モ右比率維持ニ干與シ獨逸ノ義務ヲシテ強制的ナラシムルト共ニ獨逸ヲシテ日獨貿易尻ノ推移ニ留意シ我商品取扱振ニ付不斷ノ注意ヲ拂ハシムルカ爲ニハ日獨間ニ清算協定ヲ締結スルコト最モ效果的ナリト思考セラル

### 三 清算協定ヲ締結スルコト

清算協定ヲ締結シ例へハ獨逸ニ於テハ同國帝國銀行我邦ニ於テハ日銀(若クハ正金)ヲ清算機関トシ相互的ニ口座ヲ開設セシメ獨逸ニ於ケル邦品輸入者ハ右ニ相當スル「マーク」ヲ帝國銀行内日銀勘定ニ拂込マシメ他方本邦

ニ於ケル凡テノ獨逸商品輸入ニ付テハ邦貨ヲ以テ日銀内獨逸帝國銀行口座ニ拂込マシムル時ハ兩國間商取引ヨリ生スル支拂ハ全部兩國中央銀行ニ集中セラルル次第ナリ依テ日銀ニ於テハ其内二割五分ヲ押ヘ右額ヲ本邦輸出業者ニ輸出代金トシテ支拂ヒ尙殘額アラハ同銀行ニ於テ之ヲ「プロツク」スルコトセハ獨逸ハ本邦ニ對スル輸出額ノオ迄ハ是非共買付ヲ余儀ナクセラルル次第ナリ而シテ右ハ日獨貿易ヲ四對一ニ保ツ強制的ノ手段ナル處獨逸ノ邦品消化ノ可能性及支拂能力ヲ參酌シ我方ニ於テ單獨ニ若クハ獨逸ト協議ノ上適宜右比率ヲ引上クル時ハ獨逸ハ十以上ニ、我商品ノ買付ヲ余儀ナクセラレ從テ強制的ニ貿易ノ調節ヲ爲シ得ル譯ナリ只問題ハ獨逸ノ窮状本年ニ入りテ甚タシク輸入商品ノ種類及數量ヲモ一方的ニ決定セントスル次第ナレハ右強制的清算ハ全然獨逸ノ方針

ト相背馳スヘク從テ右ニ獨逸側カ承諾ヲ與フルヤ否ヤ非常ノ疑問アリ勿論我邦ハ獨逸ニ對シ年々七八千萬圓ノ入超額ヲ支拂ハサル可カラサル關係上獨逸ノ承諾ナキ場合一方的ニ清算ヲ斷行シ得サルニ非サルモ右ハ不必要ニ事態ヲ鬪争化シ惹ヒテハ滿洲大豆ニ對スル支拂代金ヲ差押ヘラルルノ惧アリ依テ之等事情ヲモ考慮ニ入ル時ハ我方ハ清算協定締結ノ立前ニテ獨逸ヲ壓迫シ右ニ承諾ヲ取付クル様努力スヘキモノナルモ(尤モ最近長井商務官來電ニ依レハ獨逸ハ清算協定ノ實效ヲ奪ハントスルモノノ如キ處其成行如何ハ今後深甚ノ注意ヲ以テ研究ヲ要スヘキ處ナリ)大勢上結局四對一ノ比率ヲ保證セシムルカ若クハ我商品ニ對スル取扱上ノ手加減ヲ約セシメ尙序ニ懸案トナリ居ル日布獨三國間相殺ニ付獨逸ノ承諾ヲ得レハ好成績ニ非スヤト思考ス